

---

# 彼女

海山ヒロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女

### 【Nコード】

N6097S

### 【作者名】

海山ヒロ

### 【あらすじ】

ナカイマリ。

二年前からの隣人。

一年と九カ月前からの飲み友達。

文学部フランス語フランス文学科の二回生で、ぼくと同い年。

特別美人なわけでもスタイルがよい訳でもなく、口は悪いし気は強い。

そんな彼女を、ぼくは好きなのです。

「いらつしゃい」

入り口の扉のきしむ音がして、顔をあげたマスターのトオルさんが、笑顔でそう言った。

「こんばんは」

少し低めの甘い声。

風が、店内へ夜気を運んでくる。

「すこし遅かったな」

振り返らずにそう言ったぼくに答えるように、白い小さめの手が後ろから伸びてきて、カウンターのグラスを掠め取った。

「あーっ！口つけたばっかなんだぞ！」

白い喉を思い切りよくそらせ、コクコクコクと三度鳴らして彼女がぼくのビールを飲み干す。

「ごちそうさま。今日は忙しかったから喉が渴いちゃって」

唇にのこる泡を人差し指でぬぐい、にこりと笑う。

ぼくはグラスに残った泡が空しく消えていくのを眺めるしかなく、  
つた。

「今日も、だろ？お前もあんな忙しい店、よく続くよなあ」

この店での定位置であるカウンター端のストールに腰かける彼女をちらりとみた。

あどけなさの残る目もとや意外にしつかりした肩口に、すこし疲れがのぞいてる。

「びんぼー学生ですからね」

彼女の言葉に、ぼくらの前でシェイカーを振っていたトオルさんが、ふきだした。

「の、割りには三日とあけずに来てくれるよね、マリちゃん」

「トオルさんのお酒はおいしいから。わたし、ここ以外には行かないし」

「これからもよろしく」

目尻にしわを浮かべて、トオルさんが笑う。  
ほの暗いシヨットバー。

低く、かすかに流れる歌声。

今日はトオルさんの好きなアリアだろうか。

「ナリくん、今日はなにを撮ったの？」

ギネスビールを注ぎながら、マリが小首をかしげて聞いてきた。  
セミロングの髪が、さらりと揺れる。

「ナリくん？」

すこし紅すぎるぼつてりとした唇が、ぼくの名を呼ぶ。

「これおごるから飲んでよ」

ギネスの太い瓶を、音をたてずにカウンターの上ですべらせ、くるくるとよく動く大きな瞳が、上目づかいにぼくを見る。

「ナリくん？」

「じゃ、遠慮なく」

ナカイマリ。

二年前からの隣人。

一年と九カ月前からの飲み友達。

文学部フランス語フランス文学科の二回生で、ぼくと同い年。

特別美人なわけでもスタイルがよい訳でもなく、口は悪いし気は強い。

それが、ぼくの好きな彼女だ。

「いらっしやいませ」

いつものセリフに迎えられ、なに気なく顔をあげたぼくは、少々面食らってしまった。

いつもはほの闇に紛れてしまっくらいにしか客のいないこの店に、人があふれていたからだ。

「今日、なんかありましたっけ？」

ぼくの定位置、カウンターの奥から2番目に腰をおろし、トオルさんにギネスビールを頼んだ。

「いいや。金曜日っていうのもあるだろうけど、たまには混んでる日もないとね」

いつも通りのんびり笑っている。店の経営者としては人が多い方がそりゃ良いだろう。

店内をみまわしてみる。カウンターは、となりをのぞいてすべて埋まっている。五つしかないテーブル席は一杯だ。しかも、よく見れば店を埋めているのは、ほとんどが男女二人連れ。

金曜日の夜。ジャズがゆったりと流れるほの暗いショットバー。

「デーとはもってこいの場所だな」

ギネスをなめつつぼくは独り、苦笑した。

額を寄せ合いひそひそと低い声でささやく男と女。

「ひとり者には目の毒ですね」

ぼやくと、前でグラスを磨いていたトオルさんが微笑した。

トオルさんは、グラスを傷つけるから指輪はつけていないが、奥さんと娘さんの写真をカウンターの前に飾っているのを、ぼくは知っている。

「……マリでもいりゃいんだけどな」

思わずこぼれた言葉に、通りがかりのバイトの原口くんが、

「彼女なら来てますよ。ほら」

入り口近くのテーブルを指した。つられてそちらをみる。

いた。

「……へえ。今日は女っぱい格好してるじゃないか」

つぶやき、ぼくはすぐ視線をはずした。

「マリも今日は彼氏連れか」

「いいですねえ」

原口くんはのんきにグラスを洗いながらあいづちを打つ。

「原口君。二番テーブルにこれ持ってつてくれるかい？」

「あ、はい」

いつの間にも用意したのか、トオルさんがアイスペールを彼に差し出し、原口氏は退場。

「……ギネスかい？」

グラスを拭く手元を見たまま、トオルさんがきいた。

マリが来ていると原口くんが言ったとき、その顔が微妙に曇った気がする。

しまった、とでも言うように。

「XYZ、お願いします」

ギネスがすこし残った、背の低いグラスを押しやる。

この店の照明は暗い。あっちのテーブルとぼくのいるカウンターでは端と端で離れ、ひとの顔などほとんど見えないはずだ。

ぼくだって、ほんのチラツとしか見てないし。

「どつぞ」

目の前に置かれた透明なカクテルを、ひと息で半分以上、喉の奥に流し込んだ。

喉に冷たさを感じた瞬間、胃の腑が燃えるように熱くなってきた。

マリが、テーブル席についているのを初めてみた。男連れなものも酔いが、急速に下から上へと伝わってくる。こめかみのあたりが、鼓動にあわせて脈打っている。

セミロングの髪が、ほの暗い照明の中、妙に艶めいてみえた。

もうひと口、飲み下す。

いつもより濃いめにぬられた唇が、なにかささやいていた。彼女の前には、男の広い背中があった。

もうひとくち。今度は喉元から酔いがひろがる。

男の左手には、KOO Lの箱があった。

こめかみの鼓動と呼応するかのようになり、頭の中で、さつきみた光景がフラッシュバックする。

珍しくタイトスカート。ヒールのあるパンプス。グラスを持つ彼女の白い手には、指輪が光っていた。

ドクンツドクンツ。

耳の中にまで鼓動が響いている。うるさい。

彼女と男の間に置かれた灰皿には、吸い殻が山となりかけていた。ドクンツ、ドクンツ！

まるで周囲とくぎるように、ふたりの周りには、煙の霧がたちこめていた。

ズキン、ズキン。

鼓動が痛みに変化する。

「……………煙草は嫌いじゃなかったのかよ」  
煙のむこうには、彼女の笑顔があった。

「いらっしやい」

「あれーナリくん」

店に入った途端、カウンターから声があがった。

見れば、マリが大きな目を輝かせて手を振っている。

「ギネスお願いします」

注文と同時に、トオルさんはギネスの小瓶とグラスをカウンターに置いてくれた。

「ナリくんここで会うの、久しぶりだね」

伸びてきたトオルさんの手を制して、マリがビールを注いでくれる。

彼女の前には相変わらずの赤い色、ブラディーマリーが置いてあった。

「-そうか？」

「うん。一カ月ぶりくらいじゃない？」

「……撮影が立て込んでたからな」

ぼくはしなくてもいい言い訳をしてい

「大変だねえ」

屈託なく笑う、マリ。

撮影はたしかに多かった。アルバイトでやっているカメラマン助手（ようするにただの雑用）の仕事で、この頃連日朝帰りだった。

ぼくの雇い主、「師匠」は、6歳上の兄貴の先輩で、新初人という。なにやらおめでたい名前だが、本名だそうだ。年は、知らない。バイトのない日は大学の課題におわれ、講義が終わればアパートに帰り、コンビニ弁当やカップラーメンを片手に凶面をひいていた。ぼくの選考は都市建築で、製図はもちろん、大学を設計した教授の指導（趣味？）により、校舎のあちこち、近所の病院に幼稚園、はてはゼミ行きつけの居酒屋まで測量したりする。

「人間がより快適に生きるために建築はある」という彼の持論におされ、住環境がひとに与える影響を学ぶために心理学の講義もとっている。そしてもちろん、その課題も、机の上を占領している。

アルバイトと大学の勉強で、ぼくの学生生活はそこのサラリーマンよりも過密なスケジュールだと思う。このご時勢では幸運にも仕送りだけでやっていけるのだから、時折、大学だけに専念しようかとも考える。けれど。

なにもない空間に自分の思い描くモノをつくりあげる建築と、すでにあるモノを自分の中へいったん取り込み、再創造する写真。なにかをつくる、表現するというこの2つの手段は、ぼくをずっと虜にして離さないのだ。

マリをのぞいては。

この一カ月、またあの光景を見てしまうかもしれないと、ぼくはこの店に来ることが出来なかったのだ。

「ねえナリくん」

「……なに」

物思いに沈むぼくなどまったく気にせず、マリが肩をつついてきた。

「ナリくんはね、死ぬ時になにか残す？遺言とか、遺書とか？」

「……なんの話だ？」

彼女の話はいつも唐突にはじまる。

「ほら、この前アメリカで猫に全財産を残したひといたでしょう？ トオルさんといまその話をしてたんだ」

彼女の言葉をうけて、トオルさんがカウンターの下から数日前の新聞を見せてくれた。

先月突然亡くなった米建設業界の大立者であるR氏の遺言書がこのほど発表され、大株主であった複数の企業の株式を除く全財産（推定数兆ドル）をたった一匹の飼い猫に遺した

海外面のトップには、お世辞にもかわいいとは思えない太った白猫とその記事が踊っていた。

「ああ、これか。……確かワイドショーでも騒いでたな。で？これがなんだって？」

「このRさんは、この子がかわいくてしょうがないから、自分が遣せるものをのこしたんだよねえ？」

マリは、考える時の癖である人差し指を軽くあごにつけ、どこともない空間をみつめる動作をしている。

「わたしは猫じゃないから分らないけど……その猫は嬉しいのかな？それにこのひとはそれで『彼女』が喜ぶと思っていたのかな？やれやれ。どうやらまた始まったらしい。」

彼女がぼくの住むアパートの隣りに引っ越してきて、このバーで偶然会って以来、ぼくらは一緒に呑むようになった。

彼女の酒は湿っぽくも、説教くさくもないよい酒なのだが、呑むほどに饒舌になってゆくのだ。昨日読んだ本について。ある友人の話。新聞のテレビの政治面から死亡欄に、帯び広告。はては近所のおばさんから聞いた話まで、良くそこまで話題があるものだと思えるより感心してしまうほど、酒ですべらかなになった唇と舌は、世間のさまざまな事柄にふれ、「解説」してゆくのだ。

いつの頃からか。彼女が話し、ぼくが聞くという形が出来上がっていた。

「ねえナリくん？」

「……さてね。他にできることがなかったんだろ。このおっさんには子供や親類がいたようだけど、金を遣したいような相手じゃなかった。このデブ猫だけがおっさんにとって恋人や家族みたいに大事で、その『恋猫』がこれから困らないようにしたかったんじゃないか？」

「彼女は嬉しいのかな？彼女が仮に人間だったとしても」

「もらえるモノは、もらっとけばいいだろ」

ぼくのグラスは空になっている。

彼女のグラスは、まだ半分以上が赤い液体で満たされていた。

それをひといきで飲んで、マリがさらに質問を続けた。

「ナリくんならさ、いやな例えだけどだれか大切なひとが亡くなつた時、遺産として何か遺してもらって、嬉しい？」

それこそ猫の目みたいの色の変わる瞳が、ぼくを見ている。こんな風に……じつと見つめてくる彼女の瞳は、とても綺麗だと思う。底のそこまで澄んだ、覗くものすべてをひきこむ泉のようだ。

「……その時になつてみないと、なんとも言えないな……」  
さりげなくその瞳から視線をはずし、ぼくはしばし考えた。

「誰かが死んだことでなにかを得るってのは、好きじゃないな……。遺されたものは受け取るだろうけどー嬉しい……。わけじゃないな」  
マリがおおきく頷いた。

「だよな？自分を思ってくれたその気持ちは嬉しいだろうけど。物とか形のあるものはいつまでも残るし、そこに価値がある気がするけれど、『思いでの品』ってなかなか辛いこともあるよね」

コクリと喉をならしてカクテルを飲む。  
「さて。ここからが本題です。もし逆の立場に……ナリくんが遺す側になった時、なにかのこしますか？」

またあの瞳が、ぼくを覗きこむ。

この瞳に出会うたび、ぼくは目を逸らしてしまう。

美しい瞳だ。だけどその瞳は、ぼくが隠したいと無意識に願うものまでうつしてしまいそうで、いつも自分から逸らしてしまう。

今夜も、また。

「たぶん遺す」

「なにを？何故？」

即座にききかえしてくるマリ。

「何かなんて分かるか。……お前はどうかんだよ？」

切り返しの鋭さと瞳にドギマギしていたぼくは、なんとなく悔しなくなつて逆襲してみた。

「わたしは、遺さない」

あらかじめ用意してあったのか、間髪入れずにきつぱりと言いつ切る。

「なんで遺すの？」

泉のように透明だった瞳に、挑戦的な色が浮かんでいる。

ぼくを惑わす。

「何故か……。俺が死んでも、モノがなにかが残れば俺がいた証になるから……。かな」

言葉がするするでてきた。そんな事、いままで考えたこともなかったのに。

「証？」

鋭い声。なんだか追い込まれて行くような気になる。

「遺言なんてのは、言ってみりゃ自分が死んだ後でもひとに影響を与えたいから、残すんじゃないのか？」

自分でも弁解じみてきこえるぼくの答えに、マリがふいと視線をはずした。

なにかを見極めるように細められた目が、虚空をにらんでいる。

「わたしがもし遺言をのこすとしたら、こう書く。

『忘れて。わたしがしたこと、話したことを、わたしがこの世にいたことそのものを、忘れて。わたしが死んだいまこの瞬間から。お墓なんていらぬ。死体は灰にして、海や川、野にでもまけばいい。お願いだから、わたしのことを、絶対に思い出したりしないで』

時とともに忘れ去られ、『あの人はいいひとだった』なんて、時折思い出したように言われて。悲しくもないのにその場の雰囲気で泣かれるなんて絶対に嫌。

ひとの記憶なんて、時間がたてばうすれてゆく。それは当たり前だからいいの。でも、いつか忘れられるくらいなら、最初からなにもない方がいい。それにね」

口をはさむ隙を与えず、彼女が続ける。

ぼくはただ、その良く動くつややかな唇をみていた。「証？自分の生きた証をのこしてどうなるの？誰かの記憶の片隅に思い出として残って、なんになるの？」

思い出でしかなく、死んだ瞬間にそのひとのすべては終わるのに、

残したかった思い出もやがて消えてしまって、ものだけ、言葉だけのこるなんて、空しいと思わない？」

そう言い放ったマリは、口の片端だけあげ、皮肉いっぱい表情を浮かべていた。

その顔は、必死になってなにかを残そうとしている人々を、笑っているようにみえた。

「……お前のその理屈だと、建築とか芸術そのものが空しくなってくるな……」

反論めいた言葉をかえしながらも、ぼくはなんだか、とても悲しくなってきた。

彼女の一見ストイックな、排他的ですらあるその言葉の中に、「忘れないで」という切望を感じてしまったから。

忘れられるなんて、耐えられない。それなら初めから、なににもなしにして……。

彼女のものすごく脆い部分をみてしまった気がして、ぼくは罪悪感を覚えてしまった。

マリの横顔を、ちらりと盗み見た。

なにを考えているのか、その横顔は店のほのぐらい灯りの中でじんで見えた。

強がりばかりいうマリ。彼女自身は、そのことに気づいているのだろうか。

そしてあの男 KOOL煙草の男は、そんな彼女の脆さを分かっているのだろうか。

「ごちそうさま」

満足げな笑顔とともに、本日最後のお客が帰っていった。

「はあ。今日も疲れましたねえ」

深々と礼をしたあとほっと息をついたマリに、後輩バイトの由紀が大仰なため息をついてみせた。

「そうだね。今日はお客さん、少し多かったね」

マリは卓上のタバスコや胡椒の容器を集めながら答える。

その言葉に、由紀は思いきり顔をしかめてみせた。

「少しじゃないですよー。『お待ち』のお客様が、あっちの方まで列つくつてたじゃないですかあ」

由紀のミニウィンナーのように短い指が、店の出入り口から5メートル先の雑貨屋をさす。

「甘いね由紀ちゃん。わたしが入った頃なんて、あっちの方まで列がつづいてたもの」

笑ってさらに数メートル先をマリがさすと、由紀はすつとんきょうな声をあげた。

「ホントですかー？」

アイメイクを駆使して大きくした目を、それこそめいっぱい見開いている。

オフィス街に程近いショッピングモールの、イタリアンレストラン。それが、マリのアルバイト先である。店員五十名程度の店内は、シンプルかつシックな内装で、仕事帰りにスーツできても、遊び途中にジーンズで立ち寄ってもはまる、カジュアルな雰囲気。ランチで千五百円以上からと値段はそこそこ高いが、デザートの種類が豊富なのと、雑誌に何度も紹介されているお陰で、二十代から三十代の女性たちに、絶大な人気があるようだ。

マリはいままで、暇な日というのを経験したことがない。後輩の

由紀にも言ったとおり、彼女がここでバイトをはじめた当初は複数の女性向け雑誌に「穴場発見！おしゃれランチはここしかない！」などと紹介されたばかりで、雑誌を手にした制服やスーツ姿の女性客でこった返していた。最初の数週間マリは、ただ先輩たちに言われるままに、テーブルと厨房を行きつもどりつしていただけだった。「さて片付け片づけっ」と

その言葉を合図に、由紀たち後輩も片付けを始めた。

いまやマリも「リーダー」と呼ばれるバイトの統括係りになっている。新人が入ってくればイロハを教えねばならないし、自分の分はもちろん、他のバイトがとった注文も把握しておかねばならない。店長はもちろんいるし、社員も常に一名以上いるが、レジ打ちもし、時折いらっしやる嫌なお客の前で後輩がトチれば、飛んでいって一緒に平謝りすることもある。社員並の責任と義務を求められていると、重荷に感じることもある。

だがマリは、この仕事が好きだった。

すべて自分でやった方がよほどスムーズに動けるし、精神的にも楽だが、最近は新人に仕事をふることも覚えた。途切れることなく来店するお客さまに対応し、汗だくになりながらも大過なく一日を終えた日は、晴れ晴れとした気分になる。もともと机にむかって何かするよりも体を動かさしひとと接することが好きだったが、この店は時給の高さで選んだのだ。入りたての頃、時給と仕事の大変さをはかりにかけて、辞めようかと思っただけが何度もある。

いまは、ここより時給の高いバイトとでも、かえたいとは思わない。自分の自由になる金のため、さらにはバイトそのものへの興味からはじめた仕事で、大学の講義をおろそかにするつもりは毛頭ないが、ここでの「仕事」も、いまでは大切な生活の一部になっていた。

「お疲れさん」

店長の小西が、店の奥からレジ集計を終えてでてきた。

「あ、店長。お疲れさまです」

ペコリと頭をさげたマリに、小西はもはや地顔になってしまっているらしい営業スマイルを見せ、

「マリちゃん。悪いけどこれ、うえの方まで届けてくれないかな？」  
A4サイズの茶封筒をポンとよこした。中には書類でも入っているのだろう、すこし厚みがある。

「はい、事務所へですね」

マリはそこへ、前にも使いに行っていた。

「そう。悪いね。ぼくは電話を待たなきゃならないんだ。まだあつちには誰が残ってるはずだから」

「分かりました」

小西はもう一度悪いねを繰り返して、奥へと戻っていった。

「由紀ちゃん、わたしちょっとお使いに行ってくるから、あと頼める？」

近くにいた後輩の由紀にそう言いおくと、マリは店をあとにした。

「失礼します。レストラン『ANAIS』のものですがー」

蛍光灯に照らされた室内に、声が空しく響いた。

マリは、それでも一息つくくと、静まり返ったオフィスを見回してみた。

ショッピングモールの終業は八時。だがレストランフロアは十時まで営業しており、最上階にある駐車場は十時半まで開いている。

モールを運営する事務所もそれにあわせて人が残っているはずだが

……。

「すみませーん、どなたかおられませんか……？」

無駄かなと思いつつ、マリは先程より大きめの声をだし、もう一度呼びかけてみた。

電気だけが煌々とした無人のオフィスは不気味だ。ただでさえレストランのある四階から事務所のある七階まで、やたら靴音のひびく従業員用通路をとおって、うすら寒い思いをしてきたのである。

「……いませんよね……？」

だんだん小声になりながら、マリは後ずさりをしていた。と、  
「中井」

後ろでいきなり声がした。

悲鳴を飲み込み、さっと振り向くと、廊下の奥の小部屋から、「  
」ヒーカップを手にした男がでてきた。

「ッ 田崎さん！驚かさないでください！」

「お前が勝手に驚いたんだろ」

軽くにらみつけるマリに、「コーヒーカップの男、田崎は悪びれず  
に答える。

「飲むか？」

田崎がでてきた小部屋は、給湯室のようだ。田崎の白い大きな手  
に握られたマグカップからは湯気がたっている。

「ありがたいお申し出ですが、仕事中ですので」

マリの答えに、田崎がちいさく笑う。

「あいかわらず真面目だな。その真面目な中井さんが、仕事をほう  
り出してなんの御用でしょう？」

わざとらしく腕をあげて時計をちらりと見る。

「店長からのお届ものです」

マリは、その手に茶封筒を押し付けてやった。

田崎はそれを片手で受け取ると、そのままスタスタと部屋へ入っ  
ていく。自然マリもその後について行った。

「ま、座れよ」

田崎がどこやらから引つ張ってきてくれた椅子にあさくこしかけ  
たマリだが、目の前の、自分の席に落ち着いた田崎の仕草におもわ  
ず笑ってしまった。

「すこしは控えるんじゃないかなかったですか？」

左手で珈琲をすすりながら右手で胸ポケットを探る田崎に言っ  
てみる。

「だれがそんなこと言った？」

KOOLと箱をななめによぎるロゴ。白地に緑の縁取りがされた箱の端をかるくたたき、一本取り出す。

うまそうに吸って吐く煙の向こうで、『オフィス内禁煙!!』の張り紙が、すっかり黄色く変色していた。

「ふん。こりや明日だな」

田崎がくわえ煙草で封筒から何枚か紙をだしてめくった後、つぶやいた。

「……今夜も残業ですか？」

周囲の席に点在するパソコンの電源はすべて切られ、静かなオフィスにはマリ達以外のひとの気配がない。

「まあな」

「所長さんなのに変ですな」

田崎は、マリのその言葉におおげさなため息をついてみせた。

「ばか者。中間管理職つてのが、一番残業するんだぞ。いまの若いやつは定時でさっさと帰るしな」

いやに実感のこもったその言い方に、マリは声をあげて笑ってしまった。

「その発言、『オヤジ』ですよ。田崎さんまだ三十二でしよう？」

目の前に座るこの色白の男。名を、田崎雅也という。三十二歳。このモールを管理する事務所の所長をしている。モールチェーンの本社から出向してきたと聞いたことがあるが、この年齢で所長になるくらいだから、かなりのやり手なのだろう。柔和な顔とのんきな軽口からは、彼がばりばり仕事をこなしている姿など、マリには想像できないが。

最初にこの事務所へ使いに来た時。マリは入り口ちかくに突っ立っていた田崎に、

「すみません、所長さんおられますか？」

とたずねてしまった。

すこし困ったような表情を浮かべる田崎の横で、制服を着た年配の女性がぶつと吹きだし、

「所長、お客様ですよ」

マリの目の前にいた田崎を読んだのだった。

「恥ずかしかったなあ、あの時は……」

「何が？」

マリのつぶやきに、田崎が不思議そうに聞きかえす。

「いえ別に」

赤くなった頬をかくすように手を顔の前でふり、マリは勢いよく立ち上がった。

椅子がギイッと鳴る。

「御仕事お疲れさまです。わたしはまだ店の片付けが残っておりますので、これで」

「明日、何限からだ？」

「照れ隠しの早口を、笑顔でさえぎられた。」

「は？……二限から……ですけど……？」

あごをひき気味にしてこたえるマリの言葉に、田崎の笑顔が大きくなる。

「よし。一杯だけつきあえ」

言うなり机の上の書類を引き出しにほつり込みはじめる。

「へ？あの、田崎さん……？」

あわてるマリを尻目に片付けをおえた田崎は立ち上がり、大股で出口へ。その足取りはどこまでも軽い。

「あの、田崎さん？急に言われましても、片付けもまだ」

「いま何時だ？」

追いつがって言いつのるマリの前に、腕時計をはめた左手が差し出される。

その腕も、見られるほど白い。

「……十時二十分、です」

「お前いつも十五分頃には片付け終えて、着替えてるよな？」

最終点検とでも言うように、ぐるりとオフィスを見渡しながらそうつ田崎に、マリは頷くしかない。

確かに、いまから店にもどっても、由紀たちバイトは帰った後だろう。もちろんマリが帰ってこないのも、店長に厨房の片付けをしているキッチンスタッフ数人くらいは残っているかもしれないが。鼻歌まじりに歩く田崎に、マリは仕方なくついて行った。なんだからうまくはめられているようで悔しい。

レストランのある四階で、ふたりだけに乗せたエレベーターがとまった。

無言で降りようとするマリの背中に、田崎のすこし不満げな声がかとどいた。

「なんだお前、俺と飲むのがそんなに嫌なのか？」

「違いますよ！」

あわてて振り向いたマリに、満面の笑顔。

ヤラレタ。

「じゃ、下で」

得意そうな顔が、扉の向こうに消えた。

「まゝた引っかかった……」

ため息とともにそうつぶやいたマリだが、

「仕方ないか」

クルリときびすを返し、駆け出した。

その足取りは、はねるように軽やかだった。

#### 4 (前書き)

ずっと放置していました。

もしお待ちのかたがおられたら、すみません。

ものごたりに自体はブログで完結掲載済みです。  
こちらでも順次掲載していきます。

「お疲れさまでした　！いまから昼休憩ですッ。午後は天気の良い合みですが、一応2時からですんで、ヨロシク　ッ」

進行係のバイトくんが、メガホンを通さずとも聴こえそうな大声でそう宣言すると、だれもがホツと息をつき、三々五々散っていった。

すこし歩けば有名な中華街があるこの港ちかくの公園には、早朝から数台のライトバンが停車し、大きささまざまな機材と大勢の人間が広い園内を移動していた。

木陰に停めた車からもゆらりと陽炎が立ちのぼりそうな真夏日にもかかわらず、その中の背の高い何人かは、分厚いコートやセーターを着込んでいた。

「午後も晴れますかね？」

ぼくはすこし雲のでてきた空をみあげ、持っていたレフ版をおろしてかたわらの新さん　ぼくの師匠で本日の主役、カメラマン　にきいた。

「さてな。すこし曇ってくれたほうが、こっちは助かる」

撮影中ずっとのぞき込んでいたファインダーから顔をあげ、彼はおおきく伸びをした。

早朝からの撮影でもともと浅黒い顔が真夏の太陽に焼かれ、黒光りしている。

「あちーなしかし。オイ、ナル。悪いけどなんか冷たいもん買ってきてくれ」

新さんは額を伝う汗をシャツの袖で無造作にぬぐうと、ジーンズのポケットから財布を抜き、投げてよこした。

「アイスでいいですか？」

そう聞くぼくのTシャツも、絞れるくらいの汗でじっとり濡れ、背中にはりついている。

「おう。お前のも買ってこいよ。俺のは」

「『ゲロ甘な』やつですな」

ぼくの答えに新さんは満足げに頷いた。

屋外の撮影が多いせいか、常に浅黒い肌。身長は178のぼくと目線が同じ。でもシャツの上からでもわかるその胸板の厚さは、普通じゃない。ぼくの倍くらいはありそうだ。短く刈り込んだ黒髪にそげた頬。切れ長の三白眼はいつも濃いサングラスで隠され、そのうえの太い眉はあくまで厳つく……。

そんな硬派なみかけとは裏腹に、彼はそうとうな甘党なのである。撮影の後よくおごってもらのだが、それが焼き肉であろうと鮎であろうと、必ずデザートを頼む。しかもぼくなどは見るだけで胸焼けしそうな特大のチョコレートパフェやイチゴショートケーキを、その時はサングラスをはずして目を細めながら実に幸せそうに食べるのである。

いつだったか居酒屋でデザートが品切れになっていた時など、きりきりと音がするくらいにその太い眉をよせるや、足音高くその店

をあとにしてコンビニへと走った。

夜中の二時だった。

「暑い……」

アスファルトの照り返しを受けながら、ぼくは徒歩百メートル先のコンビニに向かった。

ふと振り仰ぐと、まっしろな入道雲が道路の左右に林立するビルを覆いつくすように、ぼつかりと空にうかんでいた。

真つ青な空。

雲の白。

ビルの窓ガラスの銀色。

この三色がふりそそぐ太陽のひかりに縁取られ、強烈なコントラストを描いていた。

「アチ」

口からは熱い息といっしょにそれしか出てこない。影を選んで歩いて、体中から汗がふきだしあごを伝い、したたり落ちる。撮影中はまったく気にならなかつた蝉の声がいまは耳にまとわりついて、暑さをいっそう感じさせた。

午後一時になろうとしていた。

木々の影は短く、濃い。道行くひとびともぼくとおなじように暑さにのぼせ、ふらふらと、それこそ立ちのぼる陽炎のように揺らいでみえる。

でも。

この炎天下、モデルたちは撮影中、汗ひとうかいていなかった。

今回は雑誌のグラビア撮影とかでモデルも大勢いて、モデルを「のせる」ために音楽なんかもかけてずいぶん騒がしくしているのになにかこう……ピンと張り詰めた空気があたりにただよっていた。

真夏の、体中をとりかこむ湿った大気の中。モデルたちは凜然とたたずんでいた。季節を先取りするファッション雑誌の撮影らしく、厚手のセーターや革のコートを身につけていたのに。ただそこにいるだけで、確実に肌を焦がす太陽など存在しないかのように。カメラマンの新さんが「北風が吹いてきた」と言えばコートの前をかきあわせ、「寒いからこそ寄りそうんだろー?」と言えば、こんな時期ふれるのも嫌になる毛皮のコートにふたりでくるまり、頬を寄せ合っていた。

待ち時間には、クーラーを寒いくらいにきかせた車内にこもり、忙しげに団扇であおいでは汗もができると騒ぐか、長々とマグロのように横たわっているのとおなじ人間だとは思えなかった。

プロとは、すごいものだ。

グラビアは苦手なんだよと、撮影直前までぼやいていた新さんも、流れる汗を拭いてもせずファインダーをのぞき込み、レフ版を持つばかりを時折どやしつけ、シャッターを切りつづけた。

あの時、彼のファインダーの中であの空間は、確かに冴えた陽に照らされた、木枯らし吹く都会の、冬だった。

「お待たせです」

コンビニから戻ると、新さんは園内のあずまやでひと眠りしているところだった。

ぼくの声に顔をあげたが、その目はぼくの右手の白いコンビニ袋へと熱く注がれている。

「みるく金時とリッチバナナ、どっちがいいですか？」

「両方」

すでに「つい手は袋へのびている。

「絶対そう言うと思いました」

自分用のかちわり氷を、新さんが大事そうに握りしめる袋からだした。

新さんは 幸せそうに両手にみるく金時とリッチバナナを持ち、見比べ、しばし逡巡し、やがて大きく頷くと、リッチバナナを食べはじめた。

もちろん、みるく金時はクーラーボックスで厳重に保管される。

カメラに向かうときよりも真剣そうなその表情に、ぼくは背をむけて笑いをこらえた。

「見物人が出てきましたね」

近隣の会社員だろうか。制服姿のOLさんや、クールビズはどこへやら。この暑さでもきっちりネクタイをしめたサラリーマンが、機材や、ぼくらと同じくあずまやでくつろぐモデルたちをちらちら

眺めながら通り過ぎていく。立ち止まって見ているひともいる。

「やっぱり珍しいんですね」

「だろうな」

アイスに没頭していると思っていたが、新さんはあいづちを打ってくれた。

手にはいつの間にか、みるく金時が握られていたけれど。

眼を見物人へと戻し、ぼくも彼らを見物することにした。

ほとんどは、ワイシャツ・スーツ姿のサラリーマンと、ベストにタイトスカートの制服を着たOLさん。この公園のまわりには、市役所に新聞社、たしか、大手家電メーカーの本社ビルもあった気がする。暇なのか、珍しいからか。暑いのに彼らは立ち止まったまま、ボンヤリこちらを見ている。

ふと、気がついた。

大学生のぼくはいま夏休みの真っ最中だが、もうあのサラリーマンたちにはそんなものないのだ。夏になるのが冬になるのが、学生のように二カ月におよぶ「休み」は存在しない。いまはバイトに勤しむほくだって、再来年、いや来年三回生なれば「就活」とやらを始めねばならない。いわゆるリクルートスーツを着て、会社訪問、OB訪問などで歩き回るのか。

あの中にはいる為に？

制服姿のOLたちは遠くにいるせいか、皆おなじ顔に見える。ネ

クタイにワイシャツのサラリーマンたちも。

ぼくは、自分がネクタイをしめ、しかめっ面で事務机に向かって  
いるところを想像してみた。

誰だそりゃ。

大学の専攻は都市建築。だが自分で事務所でも開かない限り、宮  
仕えの身になるわけだ。いくつもの賞を総なめにするような大先生  
以外は、見物人の彼らと同じ、サラリーマンである。

写真はもちろん好きで、だからいまこうしているのだが、将来新  
さんのようなプロになろうとか、なれるとかは思っていない。もち  
ろん、撮影がはじまれば、たとえ雑用係でもレフ版もちでも夢中に  
ゐる。しかし、彼ら「プロ」とはなにかが違うのだ。

ぼくは将来このままの道を進み、建築家になるのだろうか……？

そこまで考えて、苦い笑いがこみあげてきた。

ついさっき、ぼくは二年後にせまる就職について考えていた。

けれど、実際に職種を考えだすと、「将来」などという、ひどく  
あいまいな時を思い浮かべている。大学生活の二年間など、あつと  
いうまに過ぎるだろう。入学した日すら、昨日のように思えるのだ  
から。

高校で進路を決める際、ぼくの頭には建築の二文字しかなかった。  
周囲のおとなには珍しがられたものだ。「しっかりしてる」。たし  
か、そんな風にもいわれた。

そしていま。

希望どおりの大学に進学し、趣味の写真をバイトにできてさえい  
る。このまま順調に大学のカリキュラムを消化して、建築家への道  
を歩むのか……？

あと二年ある。が、二年しかない。

確実に迫りくる「将来」。

自分たちを遠巻きにながめるワイシャツの群れの向こうに、それがいま、はっきりと見えてきた。

「ね、すこしは元気でた？」

「うん……。いまから会ってくる」

そうささやきあう声が、カウンターにすわるぼくの耳にも届いた。

「ありがとね、マリ」

「いつてらっしい」

彼女のおどけた口調に真っ赤に腫れた眼がすこし笑んで、夜風のなかへと消えていった。

「すみませんトオルさん。お騒がせしました」

カウンターの定位置につくなり、マリが謝る。

「なあに。よかったね、彼女。元気でたみたいで」

トオルさんはいつもの笑顔だ。

「ナリくんもごめんね？」

そう言うときいさな頭がぼくの方にかたむいた。

「いや別に」

ぼろりと口からでた返事がそっけなさすぎた気がして、ぼくはあわてて付け足した。

「いいのか？あの子。もう11時だし、今夜は雨かなり降ってるぞ」

うす闇の中で、白い顔がほころぶ。

「彼氏が迎えにくるから」

「そうか」

ふと、湿り気をおびた夜風が頬をなでた。

客のだれかが出て行ったらしく、入り口の扉がゆれている。

午後からふりだした雨は、あいかわらず音もなくふりつづいてい  
るようで、ゆらゆら揺れる扉のむこうからその気配だけがカウンタ  
ーの奥にすわるぼくらまで、忍びよってくる。

「すこし驚いたけどな。あの子が泣き出した時には」

ギネスをなめながらそう呟くと、マリがすこし笑った。

いつものように、いつもの場所で。タオルさんと世間話をして  
いたら、マリがやってきた。

「あの時」をのぞけばつねにひとりでここに来る彼女が、友達ら  
しき女の子をつれて、ぼくらにちよつと目であいさつしたただでテ  
ーブルに座り込んだので、内心首をかしげていたのだ。  
頭をくつつけるようにして囁きあう女の子ふたり。

「ーだって、しょうがないのよー」

悲鳴のような声がして、片方が泣きだした。  
彼女は、泣き伏す友人の前で、じっと待っていた。  
周囲の客の目も気にせず、慰めるでもなく諭すでもなく、ただじつと、泣きやむのを待っていた。

「……仲直りできるといいけど」

眉をよせ、マリがため息とともにそう言った。

その口調ににじむなにか、慈愛みたいなものを感じて、ぼくはすこし、意外だった。

あれは……いつだったろう？まだコートの必要な寒い日だった気がする。

ぼくらは今夜と同じような場面に遭遇したのだ。

二人組みの女の子たちがやってきて、入り口ちかくのテーブルに、寒そうに身をよせあって座った。  
と。

片方が突然、泣き出したのだ。

ぼくらはその時も、カウンターに並んで座っていた。

「別れりゃいいのに」

赤い液体をみたしたグラスをぼんやり揺らしていたマリが、ぽつりと呟いた。

「なんだったって？」

彼女は泣いている子を、ちらりと横目でみた。

「人前で、なんであんな風に泣けるんだろう？もし彼氏のことと泣いているのなら、別れればいいだけじゃない？」

そう不思議そうに問いかける瞳は、どこまでも澄んでいた……。

「『泣くくらいなら別れりゃいい』。そうじゃなかったっけ？」

ぼくの言葉に、マリは怪訝な表情を浮かべた。と、

「あれはっ」

思い出したようだ。目尻がすこし赤くなっている。

彼女の狼狽に気をよくして、ぼくはさらに突っ込むことにした。

「友達だからちがうって？」

「それもあるけど」

うつむき、口元でちいさく呟く。

「それも？ほかにも何かあるのか？」

しつこい突っ込みに、軽くぼくをにらんでいたマリだが、

「ナリくん。経験って、すごいものなのよ」

いきなり、そう宣言した。

「は？」

展開についてゆけない。

「知らないということと、知っている。解っているってことは、全然違うのよ。『経験』がすべてではないけれど、ある意味すごいことなの」

いつの間にか彼女の前には赤い液体に満たされたグラスがあり、マリはそれをひとくち、口に含んだ。

「泣くくらいなら……。前はたしかに、そう思ってた。知らなかったの。その時のわたしは、まだ知らなかった」

もつひとくち。

「……しようがないのよね。投げてるわけじゃないけど、本当にしようがないのよ。どんなに嫌なところがあっても、そのせいで彼が憎らしく思えても、それでも好きなんだもの。どれだけ泣いても、そんな自分がいやになっても、好きなんだもの」

彼女の声が、頭の中でだんだん大きくなってきた。

「好き」。

その言葉が、あの場面をぼくの前に引きずりだす。

煙のむこうの笑顔。

すかしたKOOOLの箱。

彼女の紅い唇……いま彼女の目の前にある液体のように赤い……

…。

ぼくは急に喉の渴きをおぼえ、いそいでギネスを飲み干した。

「で、いまは知ってるわけだ」

すこし喉が痛む。どうやら急ぎすぎたらしい。

「あの時よりは」

透明な瞳がぼくを見返す。

今夜はそらせない。

「へへえ。マリも大人になったもんだ。……やっぱり女は、男がで  
きると変わるねえ」

茶化すような言葉がもれる。

誰をだ？

「男？」

マリが小首をかしげる。

いつの間にか、トオルさんがぼくらの前にきて、黙ってグラスを  
磨いていた。

寡黙なまなざしが頬にささる。

「二カ月前、ここがえらく混んでた日があつたら？お前、入り口に  
一番ちかいテーブルに座ってたよな？K O O L 煙草の男といっしょ  
に」

いってしまった瞬間。マリが、ほほ笑んだ。

その場の自分の感情すべてがふっとんで、見ほれてしまったくら

きれいに。

たぶん彼女は、自分が笑んでいることに気づいていないだろう。つつみこむような笑顔で、そおっと息をつくように、

「田崎さん」

その男の名を、呼んだ。

心臓が、痙攣する。ぐうっと引き絞られていく。息ができない。

「そうか……あのとき、ナリくんいたんだ。……声かけてくれれば良かったのに」

彼女の笑顔が、ぼくを刺す。

人間は感情の動物だ。身体は感情に支配されている。

しかし例外もあるらしく、ガチガチに固まってしまったぼくの身体からでも、皮肉はもれた。

「馬に蹴られたくはないんでね」

笑う、マリ。

「田崎さんはそんなんじゃないよ」

紅い唇がひらめく。

「バイト先のひとでね。よく飲みに誘ってくれるの」

彼女の透明な瞳は、ぼくをみていない。その目にいま写っているのは、絶対にー。

「でもお前は、あの男が好きなんだろう？」

ばかやろつ。

自分を心の中で罵倒する。いままでぼくらは、いろんな話をこころでしてきたのに、おたがいの異性関係については、話したことがなかった。

話すなら、彼女と自分のことにしたかった。

「ねえナリくん？わたし、前に言ったよね」

「……何を？」

なにか思い出したのか、笑うマリ。

「なんだよ」

「不倫について」

「は？」

「読んで字のごとく、絶対にしちゃいけない事だつて。妻子もちが、別の女と恋愛なんかしちゃいけないよねえ」

喉がひりつく。

なにが言いたいんだ？

彼女はなにを言おうとしている？

「田崎さんにはね、同じ年の奥さんと小学生のお子さんかふたり、ちゃんとしているの。でもねナリくん。妻子もちにする片思いも、『不倫』になるのかな？」

「……は？」

「わたしだけなの。あの人を好きなのは、わたしなの。不倫なんてだめ。絶対にしないと行ってたわたしが、あの人を好きなの」

固まっただまま彼女をみかえすぼくに、無邪気に笑いかける、マリ。

「ね？知るってことは、すごいことでしょう？」

煙草なんてみるのもイヤ、不倫なんて絶対ありえないのわたしが、苦しけりゃ別れりゃいいのこのわたしが、ヘビースモーカーで妻子もちのあの人を好きなの。

好きで好きでたまらなくて、あの人顔を思い出すだけでにやけちゃって。毎日毎日あの人ことばかり考えて。手も顔も声も、あの煙草の匂いも覚えて。

田崎さんてね、色がすごく白いの。背が高くって。学校や街でそんな人とすれ違つてしょ？絶対にその時間そこで会うわけがないのに、一瞬ハツとして振り返っちゃうの」

マリは白い頬を上気させて一気にそこまで話すと、ほっと息をはきだした。

「ーなんで、こんなに好きなんだろう」

「……知るか」

無理してこたえる必要なんてなかった。

彼女はぼくを、みてはいない。

そうだな、マリ。

知らないってことと、知ってるってことは、まったく違う。

ぼくは彼女が好きだ。

それは、ぼくしか知らない。

彼女の目の前にいるぼくがいま、嫉妬で押しつぶされそうになっているのも、ぼくしか知らない。

確かに知ることはすごいことだ。

でも良いことだとは、ぼくには言えない。

邪気のない、めったに見ることのできない彼女の無垢な笑顔が、ぼくは好きだ。

ぼくの気持ちを「知らない」からこそ、その笑顔があるのだとしたら。

ぼくはかわりに、この痛みに耐えねばならないのか。

ぼくは今日、それを初めて、知った。

「生きてるかい？」

トオルさんが目の前で手をひらひらと振っていた。

「……生きてますよ……」

ぼくはぼんやりと笑ってみせた。

なんだか顔中の筋肉がこわばってうまく動かせない。音がするんじゃないかと思うほど無理して顔を横にむけると、マリはいなかった。

「なかなか酷だね。 マリちゃんも」

片頬だけひきつらせて笑ったぼくの前に、やけに華奢なカクテルグラスがおかれた。

注がれるピンクの液体。

「ひさしぶりにね、つくりたくなっただ」

目で問うたぼくに、いつもの笑顔でトオルさんがこたえた。  
ひとくち。

「……にがい」

「でも後味は甘いだろ？」

返事のかわりにもうひとくち。喉にひっかかるような、独特の感  
触。

「うまいですね、これ。………知ってたんですね。トオルさん」  
なにを意味するかは通じた。

「知っていたわけじゃないよ。………なんとなく、なんとなくね」

そうゆったりとほほ笑むトオルさんが、いますごく大人に思える。トオルさんはまだ30半ばのはずだが、そんな年齢的なものではなく、「大人の領域」にいるひとという余裕をその笑みから受けた。

「そんなに分りやすかったかな………」  
「そうじゃないよ」

つぶやきに、トオルさんがちいさく頭をふった。

「一種の職業病だね。」

夜の7時に店をあけて、ぼくはそれから、一日中ここにいるんだ。カクテルをつくる、時折お客さんと話をする。休みの日以外、ずっとそうしているわけだ。

ぼくの世界はいわば、ここだけだから。このちいさな店が、ぼくと外との窓口になるんだ。新聞やテレビなんかじゃなく、直接の、なまの繋がりのね。

ここでのぼくは主役ではなく、この棚に並んでいる酒の瓶と一緒に、舞台装置みたいなもんだよ。

長いことこんな仕事をやっているよね、自然と話をきいているだけで判ってくることもある。この人は奥さんとあんまりうまくいってないな、とか。この二人は不倫しているのかな、とか」

そこでトオルさんはすこし言葉をきり、

「他のお客さんには内緒だよ。ほんとうはこんな風に詮索しちゃいけないんだから」

片頬だけで笑ってみせた。

「酒のある空間って、一種独特なものだと思わないか？どこか秘密めいた香りが、ここには漂っているとおもっ。ひとはそこで、ほんのすこしだけ生の感情をみせる。酒の力と空間の魔力を借りてね。ぼくはそれを、時折垣間見ているだけだよ」

グラスを磨きながらそう話すトオルさんは、珍しく饒舌だった。慰めてくれているのだろうか。どうやらそれほど情けない顔をぼくはしているらしい。

舞台装置。脇に徹する、か。

この人もまたプロなのだ。自分の役割をきちんと見極め、動いている。

彼からみればぼくなど、まだほんのひよっこなのだろう……。いつぱしの大人ぶって酒など飲んでいられるけれど、女の子のことで他愛なくおちこむガキだ。

ぼくはすこしばかり自虐的になって、カクテルののこりを一気に飲み干した。

「酒はおいしく飲むもんだよ」

兄貴みたいな表情で、トオルさんがぼくをみている。

「苦い酒だってありますよ。まずい酒だってあるでしょう」

つい突っかかってしまった。  
と。

「まずい酒がどうしたの？」

よこからマリがひょいっと顔をだして、無邪気にそつたずねてきた。

「天候によって葡萄酒はできを左右されるねって言ってたんだよ、マリちゃん」

さり気なさすぎるフォロー。

ああ、自分がさらに情けなくなってきた。

「ふん……。今年も暑いから、出来がいいでしょうね」

マリは素直に応じている。

「さて。秋の天気は変わりやすいからね」

「あ、女心もって顔ですね」

おおきな目をくりくりと動かして、マリが睨むふりをした。

トオルさんはそれを笑顔で受け流して、テーブル席のほうに呼ばれていった。

「……あれ？珍しいね。カクテル飲んでる」

マリが小首をかしげてぼくの前のショットグラスをみつめた。

「なに？これ」

「知らん。トオルさんがくれた」

グラスの底に、ほんの少しだけ淡いピンク色が残っていた。

「飲んでもいい？」

「どうぞ」

マリは、肩をすくめたぼくに会釈でもするようにグラスをちょっとあげてみせ、思い切りよくひと息でのんだ。

「知ってる。これ」

余韻を確かめるように喉にふれながら、つぶやく。

「へえ？」

「リリー・マルレーン……だと思う」

「女の名前か」

いつもギネスビールばかり飲んでいるが、カクテルにも結構詳しいと、自分ではおもっている。

彼女がいつも飲む「ブラッディー・マリー」など、ひとの名がついたカクテルは多々あれど、それははじめて聞く名だった。

「カクテルをつくった人の、恋人の名前なんだって」

「花のかわりにカクテルをつて？」

くさいなと笑うぼくに、マリは首をふってみせた。

「ちょっと違う。このカクテルをつくったバーテンダーには恋人の

がいて。結婚の約束もしてただけど、彼女は亡くなってしまったんだって。天国の恋人に贈ろうとしたんだよ、その人」

ひとり残されたバーテンダー。

彼にできた唯一のことは、恋人の名のカクテルをつくることだったのか。

なんにも遺さなかった彼女のかわりに、彼が残したのか……。ふと、マリとおなじような会話をしたことを、ぼくは思い出した。

『どうせ忘れられるなら、最初からなにも残さないほうがいい』

でも……のこされた者は？

記憶さえも消してくれと言われたものは、どうすればよいのだろう。彼女をおもいだすやすがとなるものは、なにも、どこにもない。慕えない。

あまりにも切ないじゃないか。

彼女が本当は忘れないでと願うように、のこされた人々も、忘れたくないと思っただけだ。

「せつないじゃないか」

知らずもれた呟きに、マリがこくりとうなずいた。

……じゃあなんでお前はそう言うんだよ？

「そのバーテンダーにはなにもなかったから、そのカクテルをつくったんだ。彼女とのものが、何もなかったから」

慎重に言葉を選んだつもりだったが、彼女は納得しなかったようだ。

「そうかな？」

小首をかしげてぼくを見る。

「なにかしたかったけど、もう彼女はいないから、何もできなくてでも、『何か』自分の手でやりたかったんだよ。思い出のためか、忘れないためか。だからこのカクテルを作ったんだと思う」

あっさりと一蹴されてしまった。

それはすべて彼自身のため。彼女の為じゃない。ふたりの為ではないのよ。

ぼくを見返す透明な瞳が、そう断言している。

うまい言葉がみつからず、ぼくは押し黙るしかなかった。

その間にマリは、カウンターにかえってきたトオルさんいオーダーしている。

「リリー・マルレーン、お願いします」

眉をほんの少しあげ、驚いた表情のトオルさん。それでもいつもの笑顔で応じる。

「マリちゃん。知ってたんだ、このカクテル」

ぼくと、ぼくの前の、空になったグラスをみくらべる。

「一度だけ飲んだことがあるんです」

軽快な音とともにあざやかな手つきでカクテルが作られ、彼女の唇を濡らした。

「の、ワリには、誕生秘話までよく知ってたな」

紅い唇に、目が奪われる。

そして、ぼくにあの夜を思い出させる。

「田崎さんが、教えてくれた」

煙の向うの、あの笑顔。

「大好きなひとと、最初に飲んだお酒なんだって」

いまぼくに向けられているのは、哀しそうな微笑みだけ。

今夜はもうだめだ。

夏の雨が、とんでもないものを運んできた。

いや。真実をみせつけてくれたのだらうか。

ああもういい。もういいよ。

彼女の瞳はぼくのものじゃない。その唇も声もぼくのものじゃない。ぼくには向かってない。

すべて、すべて「田崎さん」のものなんだろう？

気づかないうちに、声をあげて笑っていたらしい。マリが目を見開いてきいてきた。

「どうしたの？突然笑いだしちゃって」

喉をクツクツと鳴らして笑い続けながら、ぼくは彼女を真正面で見つめた。

「なあ。そんなに『田崎さん』が、好きなのか」

あろうことが、マリは瞬時に耳まで赤くなった。

「なに言って……」

「オイオイ、あれだけ自分で連呼しときながら、なんで赤くなるんだ？」

「いきなりっ……聞いてくるから……」

目をそらして、口のなかでなにやらごにょごにょ呟いている。

その妙にシャイな反応に勢いを得て、ぼくはさらに続けた。

「あれだけ熱烈な愛の告白をしてくれたじゃないか。ひとから聞かれるのは恥ずかしいとでも言うつのかよ」

耳だけでなく、首筋までが朱にそまっている。

「……うん」

「まあいいじゃないか。恥ずかしついでに、ふたりの馴れ初めでもきかせてくれよ」

「……ナリくん……酔ってるでしょう？ひさしぶりにカクテルなんて飲んだから」

真っ赤な顔のまま、マリがぼくを軽くにらむ。

「酔っててもなんでもいいからさ。まあ話せよ」

重ねるぼくに、彼女はため息ひとつ。

「ナリくんが酔ってるところ、ひさしぶりに見たなあ……。そこの天気も変だけど、今夜のナリくんも変だね」

その言葉に、ぼくはピタリと笑うのをやめた。

言ってしまうのか。

あまりにも遅すぎて、陳腐なだけだけれど、言ってしまうのか。

「……たしかに、今夜は変だろうな」

でもぼくがその続きを言うまえに、彼女が口を開いてしまった。

「あれは……いつだったかなあ……」

雨は、まだ降りつづくようだ。

「あの子、ちょっとでしゃばりじゃない?」

話し声に、扉にかけた手がとまった。

閉店後の片付けも無事終え、着替えようとマリは更衣室に来ていた。

「わたしが注文とるじゃない?それで料理がでてくるの待ってたら、あの子がさっさと持ってっちゃうのよ」

中から聞こえてくるのは、バイトの先輩である、夕美子のようだ。

「気をつかってるんじゃない?」

この優しい声は、おなじく先輩の、夕美子といちばん仲がよさそうな薫のものだろう。

マリは、扉の前で足をとめたまましばし迷った。

中のふたりはどうやら、だれかに対する批評、というよりは陰口をいっているようだ。

漏れぎこえる言葉から、おもに夕美子が文句をいい、薫がフォローしているように聞こえる。いま中にはいれば、話を聞いていたのがふたりに知られてしまう。やはりそれはまずいだらう。

「そうお?そんな風には見えないけどー?」

夕美子の口調にはかなりの刺がある。

「あの子」ってだれだろう？

アルバイト先のレストラン「ANNAIS」には、現在マリをふくめて10人のバイトがいる。男女は半々。

夕美子と薫はもう3年目になるベテランの先輩たちで、マリも彼女たちに仕事のいろはを仕込まれた。特に夕美子とはシフトがかぶることも多く、その仕事ぶりと明るいカラッとした姉御肌の人柄を、マリは慕っていた。

その夕美子が陰口をたたいている現場にいあわせてしまい、マリはすくなくからず驚いていた。

「そんな言い方しないの」

薫のやんわりと諭す声がする。

彼女は、どんなに店が忙しくてもそうしているように、ゆったりとした微笑をそのちいさな顔に浮かべていることだろう。

「マリちゃんは、まだ慣れていないから頑張りすぎちゃうのよ、きつと。その内ペース配分を覚えるわよ。だって、彼女がうちに来てからまだ2カ月じゃない」

いま、たしかに薫は自分の名をいった。

マリは、扉からゆっくりと後ずさった。

「じゃあなんで、2カ月しかたつてない新人がチーフになれるのよ？仕事を覚えるのはわりと早かったけど、まだまだトロイところあ

るじゃない。店長にでも媚売ったに決まってるわ」

足がうまく動かない。

言葉が、つぶてのように飛んでくる。

「だいたい私、最初からあの子との事好きじゃなかったのよね」

マリは扉をみつめたままじりじりと後ずさる。

やめて、やめて。

扉が開きかけた気がして、弾かれたように駆けだした。まるでその場から逃げだすように。

「　　っと失礼！………なんだ、中井さんか」

声とともに、目の前の白い壁がひょいとわきにどいた。

「………田崎さん………」

薄暗い廊下。白いまあるい笑顔が、だいぶ上のほうに浮かんでい  
る。

「………どうした？いつもの元気がないなあ。彼氏と喧嘩でもしたか

「？」

ひとつだけの乾いた笑い声が、廊下に響いた。

田崎が、眉をよせてマリの顔をのぞきこむ。

「どうした？」

背の高い、色白で柔らかな印象をうけるこの男　田崎とは、ひよんなことから親しくなり、会えば立ち話をする仲だった。

仕事で直接付き合いがあるわけではないが、店長のお使いでマリはちよくちよく、田崎が所長をつとめる管理事務所に行っている。

32歳で所長。しかし、その役職を感じさせない柔らかな笑顔の彼は所内外で人気があるらしい。「義理」にはどう見てもおもえない気合の入ったチョコレートを受け渡し現場に居合わせたことがあり、苦笑とともにお裾わけしてもらったことがある。

外見からはまだ20代にしか見えない田崎に、マリも好感を持っていた。

「どうしたんだ？」

なんで、子供に聞いているみたいに言うの。

うつむき、マリはつぶやいた。

ずっと走っていたせいで、心臓の音がうるさい。深呼吸をひとつして、いつものように笑顔で―

「中井……さん？」

田崎のやわらかく細められていた目が、おおきく見開かれた。

「……………何があつた？」

頬がむずかゆいと思つたら、涙がつたつていた。

マリは、奥歯をぎゅつとかみしめ、いそいで横をむいた。

涙など見せたくない。たかがバイト先で陰口をたたかれただけじゃないか。

マリは、公私というほどおおげさなものではないが、バイトとその他の生活をかなり明確にわけていた。いくら親しくなつたとはいえ、仕事でかかわりのある他人に、自分の生の感情をみせるのは嫌だつた。

ほんとうならこのまま走つて逃げたい。

しかし、それでは田崎が気にするだろう。これからも彼とはここで顔をあわせるだろうし、気まずい思いはしたくない。

そう思うとマリは、根がはえたようにそこから動けなかつた。ただ黙つて横をむき、泣いているしかできなかった。

ちいさい頃から、悲しい時よりも怒つた時、悔しい時に涙がでてきた。

いま心にうずまく感情がなにかはわからないが、マリは、全身で拒絶をあらわすように横を向いたまま、ただじつと立っていた。

「……………今日、残業だつたんだよ」

「……………え？」

妙に明るい田崎の声がふつてきて、マリは思わず彼をみあげた。

「事務所の人間はみんな帰つたのにさ、ぼくひとりでこんな時間ま

で仕事してるんだよ」

いぶかしげなマリの表情などまったく気にせず、どこまでも明る  
い田崎。

彼独特の、まあるい笑顔。

「だから、可愛いそうな僕と、一杯だけつきあってよ」

いつの間にか涙はつまっていた。

しかし、恥ずかしくてマリはなにも言えない。

「じゃ、下で待ってるから」

そう言い置くと、さっさと田崎は行ってしまった。

しばらくぼんやりとその広い背中を見送ってたマリだが、

「田崎さんが待ってるから」

勢いよく更衣室へ駆け戻っていった。

「いくつで所長になったんですか？」

コントラバスの低いうなりが身体にしみる。

「……………ん？」

カウンターにマリと並んで座る田崎は、誰かさんとおなじく、ギネスビールを飲んでいる。

マリたちのシヨップینگモールからそう遠くないところに、田崎の「隠れ家」はあった。

バーにしては広めの店内に、ぽつりぽつりと客がいた。

マリがよく行く「トオルさんの店」は、黒を基調とした装飾の、なんとなくニューヨークあたりにありそうなスタイリッシュな内装のバーだ。

田崎が連れて来てくれた店は対症的に、飴色のカウンターにがっしりとしたつくりつけの棚。照明も、トオルさんの店の極限までおとしたものとは違い、木の温もりを味あわせ、隣り合う他人の顔をてらす程度には、明るい。

おいしい珈琲の店。そんな感じだった。

「所長になったのは、去年の秋だ」

この人も、ギネスをおいしそうに飲む。

マリは、田崎がかたむけるグラスと、それを握る大きな白い手を漫然とみていた。

「え？」

「去年の秋だよ。前所長が突然でてこなくなっただけね。他になり手がいなかったんだらう」

ゆっくりと、笑う。

本当にそう思っているのか、謙そんしているだけなのか。その笑

顔からは推し量れない。

「31だったな」

弦の低いうなりが、一定の大きさですつと響いている。それがな  
んの曲なのか、マリには分からない。

目の前の赤い液体をみつめ、しばし迷ってから、マリは口を開い  
た。

「田崎さんは……その時、なにか言われませんでしたか？……周り  
のひとから」

弦の音に聴きいるように目を閉じていた田崎は、ゆっくりとその  
目をひらいてマリを見返した。

「何かって？」

「たとえば……若すぎる、とか」

くすりと、田崎が笑う。

「たしかそんな映画があったな。さて……あつたかな。辞令がお  
りた時、すこし驚かれてはいたね。部下になる所長補佐は、僕より  
10以上、年上だったし。同僚に、上司の腰ギンチャク呼ばわりさ  
れたこともあつたかな」

くやしいとかの感情とは無縁の表情で、淡々と続ける。

「僕自身驚いたしね。当然の反応だろう。なにか特別、会社に貢献  
した覚えもなかったし。本部の部長や専務に取り入った覚えもなか  
つたしね」

そこではじめてそのすつきりとした右頬に、皮肉な笑みが刻まれた。

「田崎さんが。田崎さんが所長になったのは、能力を認められたからでしょう？それなのに……陰口なんかいうひとは、卑怯じゃないですか」

カチンッ

マリが、言葉とともに投げ出すようにして置いたグラスが、鳴った。

田崎はただ微笑んで彼女をみている。

「自分ができなかつたから、だから嫉妬して、けなしているだけじゃないですか」

言いつのるうちに、腹のそこからむらむらと怒りが込み上げてきた。

そう。マリは今日、バイト生活三カ月目にして「チーフ」になった。チーフとは、その時間帯にはいるバイトたちのまとめ役で、店長や社員がいない時にはレジを任される。バイトの一番上はリーダーと呼ばれる位置だが、チーフはその下にあたる。

閉店後、店長に昇格を告げられ、かなり驚きはしたもののやはりうれしかった。バイトをはじめてこの2カ月、メニューを頭にたたきこみ、バイト帰りのくたくたの身体で眠い目をこすりながら、イタリア料理の本を読むなどして勉強していたことが、報われたと思っただのだ。

バイト先のレストラン「ANAIS」では、バイトであろうと料

理やワインについて詳しい人がほとんどで、バイトから社員になった先輩も多い。テーブルマナーがどうのという堅苦しい店ではないが、やはり料理を運ぶさい、お客様にお出しする際の立ち位置や言葉づかい、声のかけかたまで指導された。

ひとによつて教えてくれることが微妙に違つたり、メニューの説明ができず恥ずかしい思いをしたことがあつたりと、なかなかキツイ2カ月を送つて、この頃やつと一人前になれたのではと、思えてきたのだ。

現に、先輩の夕美子も今夜の人波が一段落した時、

「慣れてきたじゃない。その調子よ！」

そう、言つてくれていたではないか。

それなのに

「だれかが努力したことや何かで報われたと時に誹謗する人はひどい。しかも……陰で言うなんて……ずるいじゃないですか……」

悔しくて、また涙が浮かんでくる。

マリは慌てて目をしばたいた。

田崎は さきほどからずっとおなじ笑顔のままマリをみていたが、

「バイト先で、なにか言われたのか」

質問というよりも確認するようにそう言った。

黙つて唇をかむ、マリ。

「人と違えば、それだけ注目されるし、なにか言われることも多く

なる。言われることが良い時もあれば、悪い時もあると」

「なんでっ……なんで陰で言うんですか。うわべでは優しいこと言うのに、裏で……」

田崎に言ってもしようがないと分かっているながら、言葉が、悔しさがあとからあとからあふれてきた。

夕美子のほめ言葉に得意になっていた自分が、恥ずかしいとも思う。はたで見えていれば、さぞかし滑稽だったろう。

「なにかが欲しくて、それを目指して一生懸命やって……。それは、いけないことなんですか？待たなきゃだめなんですか？まだ早いから？できるだけ控えめにしなきゃいけないの？

それが……ひとの上に立つことが目的じゃなかったのに……自分でやってみて、認めてくれたと思って……。うれしかったのに」

頬をつたう涙が、ぽとりと音をたてて手の甲に落ちた。マリは、ぎゅっと唇をひきむすんだ。

だからお前はいつも、唇があかいんだ。

悔しいとき、怒ったときいつも唇をかむマリをみて、いつだかなリヒラがそうからかった。

田崎は　　グラスに残っていたギネスをゆっくりと飲み干し、マリの話を聞いているのかいないのか。あいかわらず低く流れている弦の音色に聞き惚れているかのごとく目を閉じ、その口元は笑んでいるようにもみえた。

そんな田崎の横顔にちらりと目をやり、マリはひとつ、ため息を

ついた。

「すみません。田崎さんにこんなこと言っても……しかたありませんね」

その言葉に答えたのが、ちいさく笑う。

この人は、なぜ、何を思って誘ってくれたの  
だろう？

マリの頭にふと、そんな疑問が浮かんできた。

## 8 (前書き)

すみません。書いてる本人も身体がむずがゆくなるほどりりカルです。

田崎は 仕事場で見える限り、いいひとだ。時折耳にする噂では、妻子持ちらしい。「大恋愛」の末結ばれた、愛妻家とも聞いた。

しかし、マリが知っているのはそれだけだ。

バイト仲間とはわりにのみに行ったりするが、直接関係のない「上の人」(?)とこうしてカウンターで並んでいるのも、考えてみれば不思議である。

関係ないからこそだろうか？

そんな田崎に勢いにまかせて愚痴ってしまったが、内心彼は、呆れているかもしれない。

マリは、急に胸がざわざわと不安に騒ぐのを感じた。

田崎のことは嫌いではない。勘違いがもとで知り合ってから、好意は持っているのだ。

妻子持ちと聞いた時、少なからずショックを受けたのも覚えてい

る。せつかく誘ってくれたのに愚痴ばかり言う自分のことを、彼は嫌になったのではないか………？

そう思うと、その考えがまるで真実のように思えて、マリはそわそわと田崎を盗みみてしまった。

彼の表情は店にはいつてから、少しも変わっていないように思える。

だがその柔らかな笑顔の裏側を窺うことなど、マリにはできなかつ

た。

「 田崎さん」

「何？」

口元に笑みを浮かべたまま、田崎が見かえしてくる。

「怒ってないですか？」

きいた瞬間、マリはまた唇をつよくかみしめた。自分のその言葉や、そうきいてしまったこと自体が、ひどく情けないことのように思えてしまったからだ。

唇を、色が変わるほどきつくかみしめたまま俯いているマリを、田崎は小首をかしげてしばらく見ていたが、やがてなんとも言えない笑顔になった。

「君は、おもしろいな」

「すみません。変なことをききました」

言い訳のように急いでいう。

穴があつたら入りたい。

マリのそんな反応に、田崎の笑顔がさらにやさしくなった。

「『おもしろい』じゃ語弊があるか。不思議。そう、それがいい。ほんとうに、何でもないことを気にするんだな」

「初心者なんです」

「そうでもないだろう？ たぶん、強気にみえる部分と、いまみたい  
に気にしすぎる部分とが、アンバランスなんだろう」

ひとり納得したようにうなずく田崎だが、マリは顔をあげられない。

自分のいった言葉を、相手がどう思うか。  
本当はこの人、わたしを嫌いなんじゃないか。

ひとの顔色を窺うような自分のそんな考え方が、マリはひどく嫌だった。自分の中にそんな弱い部分があることを、認めたくなかった。

「普通」でいるのも、ひとと同じも嫌なのに。独りになるとたんに不安になってしまう。田崎が言うようなそんなアンバランスな部分、気にしすぎる自分をマリは受け入れることができない。だからだからこそ。その弱さを意識するあまり、ひとに悟られまいと必死になるのだ。

いまも、相手が田崎だからというのではなく、凶星をさされたことで、マリは思い切りうるたえてしまった。

「……わたしは……わたしはしゃばりなんです。礼儀も知らないし、ひとの言うことも聞かないし……いつも、いつも張り切りすぎて失敗するんです。でも、でもわたしは、ただ」

あとに続けようとした言葉はひどく言い訳じみているように思えて、マリはまた唇をかみしめた。

ただ、頑張ろうとおもった。

ひとの足手まといには、なりなくなかった。

はやく仕事をおぼえて、夕美子さんたちのようになりたかった。もっと、いろんな事ができるようになりたかっただけ。

ただ、わたしは、もっともっと……。

「いま持っているものだけで、満足しなきゃいけないんですか？ひとが持っている才能や特技や……それを目指して、欲しいと思っちゃいけないんですか？それは、デシヤバリなの？いけない事なんですか……？」

「『いけない事』だったらやめるのか？」

口元に笑みを浮かべたまま、田崎がいった。

「駄目だろうとほしいものは欲しい。他人にどう言われようが、ほしい気持ちは変わらずあるんだから、しかたないだろう？」

その柔和な笑顔を、マリはぼかんと見つめてしまった。

「大人」として、諭されるものと思っていた。

世の中とはそういうものだ、と言われると決め込んでいた。

「でも、でもわたしはたぶん、もう十分に持っているんですよ？」

うるたえるあまり、さっきとは矛盾することを言ってしまう。

「充分？そうじゃないと思ってるから、欲しくなるんだろ？」

答えられない、マリ。

田崎が、当然のように言ってくれたから。諭すでもはぐらかすでもなく、当たり前だ。それでいいのだと、受け止めてくれたから。

やわらかく、強く、包み込むように。

「他人から見りや充分でも、お前が満足してなきゃ何にもならんだろ？望んでなにが悪い。欲しいものがある。どうしても手にいれない。そう思うのは、当然だろう？」

ゴチャゴチャ言う他人が、お前にそれをくれるのか？ほしいものがあるんなら、お前が自分でつかむしかないだろ？」

水みたいにギネスを飲みながら、マリをみすえて田崎が言う。

胸に何かがいっぱいあって、喉まででかかっているのに舌がもつれて出てこない。

望んでなにがわるい？

当然だろう？

耳の奥で、田崎の言葉がこだまする。

喉がやけに渴いた気がして、マリはグラスをぎゅっと握り、ひと息で飲み干した。

「ありがとう……って、言っていないですか」

つぶやくようにそう言ったマリに、田崎は一瞬きよとんとし、ついで、くすくす笑いながら彼女の頭をぽんぽんとたたいた。

「お前ね。なんでいちいち遠慮するかな。自分がしたいことすりゃいいだろ？お礼いわれて怒るやつがいるか？」

まあるい笑顔がそう言う。

「ありがとうございます……」

耳まで真っ赤になったマリは、涙がでてしまいそうので慌ててうつむいた。

「ほら、遠慮しない」

笑顔のまま、田崎がマリのあごにそっと触れ、上向かせた。

「田……崎さん……？」

「涙は女の特権だ。どうせお前のことだから、『いま泣いたら田崎さんが迷惑する』なんて思ってるんだろう。俺は女好きだからいいんだよ。」

ほら

うつたえるマリの頬を、そう言って軽くつねった。

「……ふっ……うっ……」

大粒の涙が頬をつたい、そこから田崎の指へと伝わっていく。

「泣いて……いいんですかあ……？だっ……て、でも……」

頬をつねられたままボロボロ泣きながら、なおそう言いつのるマ  
りに、

「つねられ足りないか？」

田崎が笑いながら、もう一方の手をのばす。

慌ててマリは首をふり、その拍子に涙が音をたててこぼれた。

なんで、こんなに涙がでるんだろう。

その答えも見つかからないまま、マリは、ただ涙を流しつづけた。

## 9 夜中の電話

「もしもし」

自分の声とは思えないほど、低い声。たぶん熟睡していたせいだろう。頭もおもい。

「……………ああ、起きてたか」

スルリと、受話器をとおして声が忍び込む。

マリは、時計にちらりと目をやった。

午前1時20分。

まっくらな部屋の中で、目覚まし時計の文字盤だけがぼんやりと光っている。

「電話で起こしておいて、それはないと思いませんか？」

文句を言いながらもくつつきそうになる目をこすりこすり、きちんとベッドから起き上がった。

「とらなきゃいいんだ。こんな夜中の電話なんか」

電話機ごとキッチンへ持って行きながら、マリの口から笑いともため息ともつかない声がもれた。

「ケンカ、ですか？」

「俺は悪くない！絶対に悪くないぞ。あいつが、あいつが……………」

きつといま、少し口をとがらせて、子供みたいにすねてるんだろ

うな。

忍び笑いが聴こえないよう、マリは送話口を押さえた。ついでに冷蔵庫から麦茶をとり出す。

ひとくち。

喉をすべってゆく冷たさが、眠気をほんの少し覚ましてくれる。

明日 今日、一限からなんだけどな。

だれにもなく呟いてみる。

確かにこんな夜中の電話なんかとらなきゃいいんだ。一度寝入ったらなにがあっても起きなかったのに……。

「俺、だよな」

しばらく黙っていたと思ったら、しょげかえった声が聞こえてきた。

「……彼女は？」

「うん。……帰った」

「帰った？」

「……帰れって怒鳴ったから」

「仲直りしに行ったんですよね？」

「しようと思った。あやまろうと思ったんだ。でもな」

やれやれ。

仕事はさっさときっちりやるらしいのに。

とぎれがちな電話の声を聞きながら、マリはグラスの外側をつたう水滴を、ぼんやりと見ていた。

何回目だろう？こうして夜中の電話を取るのは。

夜寝る前。

バイトが終わって、疲れきった身体を引きずって電車で足をかけた時。

いつも、一、二瞬考える。

ああ今日も疲れたな。今夜こそはゆっくり眠ろう。なにがあってもぜったい起きるもんか。

でも……もしかしたら……今夜もベルが鳴るかもしれない。

いつの頃からか、キッチンに置いていた電話機をベッドのすぐ横に移動させていた。

ぐっすり眠っていても、すぐ電話にでられるように……？

朝起きて、まず最初に電話に目を走らせるようになったのは、いつからだろう？

「俺がなにか言うだろう？そしたら黙るんだ。『黙ってないでなんかな言えよ』そう言ったら、謝るんだ」

電話の向こうからは、繰り返言めた彼の言葉がもれてくる。

「あいつは悪くない。この前のケンカだって、俺が原因だ。いつも悪いのは俺で、あいつを悲しませている。ただ……言いたいことがあるなら言っただけいいからきいてるのに……」

「思ってることをうまく言葉にできない人は、多いと思います。そ

れに、怒って欲しくないから謝っちゃうんでしょっ？」

「自分は悪くないのか？あいつはいつつも黙り込んで、自分のなかに溜めて……」

「『黙ってこっくり頷いて。自分の気持ちより俺の気持ちを考えてくれるんだ』ってのろけてたの、誰でしたっけ？」

「……俺」

ケシヨンとしている。

なぜわたしには言えて彼女には言えないんだろう。

「いま何処ですか？」

ため息まじりにマリは聞いた。

「ん？……『Poursuite』」

遠慮がちに答える声。　こうやって電話してくる夜は、必ずそこにいる。

最初に連れて行ってくれた、飴色のカウンターの店。

「……いまから、来れないよな……？」

一、二瞬の沈黙のあと、こう言つのもおなじ。

午前3時。

いまから行けばそうなるな。

「……1時半ですね」

「1時半だな」

いまこの人は、どんな顔をしているのだろうか？

「寝てたんですね、わたしは」

「……うん」

いまから行ったところで、どうせこの人はすぐに寝てしまつのだらう。

いつものように。

「どこですか？お店の前でいいんですか？」

結局、わたしはこう答えてしまふ。

「うん。……待ってるからな」

安堵したような、急に元気になったような、彼の声。それじゃ後でと電話を切り、急いで着替える。

口紅を塗りながらふと鏡の中の自分と目があつた。目の下に隈のできた眠そうな顔。

「馬鹿だよなあ………」

それでも鏡の女は笑っていた。

10 「大人」になるとは

「お疲れさまでしたー」

倉庫のような、天井の高いスタジオ内に、ぼくの声がこだました。

「お疲れさん」

「おつかれー」

呼応するようにここここでスタッフたちが声をかけあい、ハレーシヨンをおこしそうなほど眩しかった照明も、次々と落とされていった。

「新さん、お疲れさまです」

まだ真っ白なバックスクリーンを黙然と見つめつづけていた師匠に、ぼくは声をかけた。

「ん？ ああ」

夢からさめたような表情でふりむく。  
と。

「なあナル。お前、ここに来てどのくらいになる？」

突然そう聞いてきた。

レンズの焦点をあわせてゆくように、新さんは視線を細く研ぎすませてぼくをみている。

「えっ………と、そろそろ一年になりますけど………？」

あごを引きみにして答えた。

「そうか」

ファインダーを覗いている時よりももっと鋭い視線ははずされ、バックスクリーンに戻った。

「なんですか？」

質問と視線の意味がわからず、ぼくは目をおよがせた。

いつの間にか、スタッフはみんな帰ったようだ。ガランとしたスタジオ内には、ぼくと、家主の新さんのふたりだけ。

なんだ？なんか失敗したっけ？いきなりクビとかじゃないよな？

「お前、カメラマンになる気はないのか」

ガシャン。

彼の眼のシャッターがおりた。

きつとぼくの間抜け面を焼き付けたことだろう。

「……プロとしてって事ですか」

そう問い返したぼくの声は、へんに裏返っていた。

「そうだ」

短くこたえる彼の眼はもう細く絞り込まれ、つぎのシャッターチャンスを狙っている。

「急に……どうしたんですか？」

彼の眼から逃げるように視線をはずした僕に、新さんは一葉の写真をつきつけた。

「この前の現像分に紛れてた」

ぼくの眼は、それに吸いよせられた。

「お前が撮ったんだろっ？」

「はい」

「焦点があまい。焼きすぎて白が死んでる。液に浸けすぎたか。時間をきちんと計れていつも言ってるだろっ？だが」

目の前に、それが押し出される。

「いい写真だ。この娘がいろいろって意味じゃないぞ。この娘はたしかに可愛いが、写真のよしあしを決めるのは、モデルじゃない。撮る人間の一瞬の想いだ。被写体に対するな」

春の 午後だった。

玄関のカギが、珍しくかかっていたいなかった。

部屋の奥から風が吹いてきて扉を開けた。

彼女は、ベランダにいた。

ベランダと部屋の間敷居にクッションをひいて、窓の枠にもた

れていた。

ゆったりと、やわらかな眠りの中で漂いながら。

「この写真にはやさしさがある。この子を守りたい。そんな願いが」

そう、そう思った。

なんのていらいもなく、ただ無心に眠っていた彼女。

「お前が建築やってて、写真はただの趣味ってのは知ってる。けどな  
」「  
」「新さん」

プロの眼が、ぼくを見る。

ぼくの、困惑した表情を。

「何だ」

「ぼくにはプロの意識や、意欲なんてものがないんです。新さんが  
ファインダーをのぞくような、鋭い眼がないんです。それに、この  
写真は……」

あとが続けられない。

「恋人か？」

「違います」

プロの眼は、ぼくの笑いからなにを見てとつたろう。

そうかと彼は口の中で呟き行きかけたが、

「さっきも言ったがプロの意識なんざ二の次だぞ。大切なのは思い入れだ。それに対するな」

ぼくの手には、そっと写真をのせた。

## 11 彼女の涙

「カメラマンさん、お疲れさま」

アパート前の路地を歩いてしていると、低めの甘い声が降ってきた。

「……マリ。どうした？」

見上げれば、彼女がベランダで手をブンブンふっている。

「月が綺麗じゃない？」

機嫌よさげにそう言って空をさす。

よく見ると、片手にはビールの缶が握られていた。

「お前……蚊にくわれんぞ」

我ながら間抜けなセリフだ。

「平気平気。わたしをくう蚊なんていないから」

なんか、あつたかな。

ココロと機嫌よく笑う彼女を見上げながら、なんとなくそう思った。

彼女は普通、家で、しかもひとりで酒は飲まない。

もちろん、一緒に暮らしているわけではないから断定はできないが、すくなくともぼくが知るかぎりはそうだ。

「いま行くからちょっと待ってる」

ぼくは急いでアパートの階段を駆け上がり、自分の部屋のドアを素通りして、まっすぐ隣の、彼女の部屋に向かった。

「いらっしゃーい」

一応ノックしてから開けると、マリはさっきと同じくベランダにいて、にこにこ笑いながら手招きしている。

その素足の足元には、封のあいた6缶パツク一箱、そしてひしやげた空き缶がいくつか転がっていた。

その間に鎮座するのは、ピンクの豚の、蚊取り線香台。薄い煙が立ち上っている。

「ナリくんも飲むよなー？」

玄関で突っ立ったままのぼくに、足元の缶をひとつ取って振ってみせる。

「ほら、はやくはやく」

「わかったよ」

ため息ひとつ。

ぼくはせかされるままに、のそのそとベランダへ向かった。

「はいカンパニー！」

泡が飛び散るのもおかまいなしで、彼女は缶をふりまわし、コクコクとおいしそうにビールを飲む。

「ほらほら、ナリくんも飲んで」

ぼんやり彼女を見ながら持ったままだったぼくの缶も、さっさと開けてしまう。

「元気ないぞー？なんかあった？」

「なにかあるのはそっちだろ」

笑顔が、一瞬にして消えた。

赤い色をつけた爪の横にころがる、ビールの空き缶。

うつむく彼女の向こうにあるサボテン。もうすぐ花が咲きそうだ。壁のポトス、部屋にいた方がいんじゃないのか？

うつむいたままの彼女にどう対すればいいのかわからず。横で所在無くビールをなめながら、ぼくはそんなどうでもよいモノを見ていた。

と。

「ナリくん、わたしのこと好き？」

ゴフッ！

すんでのところで、ビールを吐き出さずにすんだ。

「ねえ、好き？」

うつむいていた顔をあげ、まっすぐぼくをみて、笑顔でくりかえ

すマリ。

その邪気のない表情のおかげで、ぼくは自分の狼狽を隠すことができた。

「何があつた？」

問いかげに、彼女は首をふる。

「マリ？」

「前はね、昔はこんなふうの人にきくなんて、絶対にできなかった。だって、怖かつたんだもの。『きらい』。その言葉がこわかつた。友達にさえ、冗談でもきけなかつた。聞いたとたん、その子が離れていっちゃん気がしてきけなかつた」

寂しそうに、ほんとうにさびしそうに、彼女が笑う。

「ひとから好かれてる自信なんてまるでなくて。試すためにわざと乱暴にふるまったり、きつい言葉を使ってみたり。」

『わたしは冷たい人間だから』  
はじめから、自分からそういつて相手を牽制してた。案外冷たいひとなんだなんて、あとから絶対に言われなくなつたから。失望したような、あきれたような表情をされるのがとてもこわくて、いっつもびくびくしてた」

月明かりを頬にうけながら、缶をかたむけひと口。

「なのにな」

ふと、笑つた。

「いつも前だけ見てるみたいって言われてたの。悩みなんて、ないんでしょって。いつもこわかったのに。いつか皆、わたしから離れていくかもしれないってびくついてたのに。でも誰にもきけなかった。わたしのこと好き？って、きけなかった」

あの透明な瞳が、ぼくをみつめた。

大きなその瞳は揺れてはいたが、潤んではいなかった。

冴えざえとしていた。

かける言葉がみつからないくらいその瞳はその底まで澄み、その光がぼくをまっすぐに射た。

「そんな自分が……嫌いだったのか？」

いきなり、彼女の両目から大粒の涙がこぼれおちた。

瞳だけは変わらず冴え冴えとしているのに。

「そう……ううん、違う。嫌いじゃなかった。好き、大好きだった。だけど、そんな自分を好きでいてくれる人なんか一人もない気がして、すごく悲しかった。

嫌いな部分もあったよ。でも、みんなが見ているのはその部分だけのようにも思えて。ひとが認めてくれないのが、なによりも悲しかった。自分ではすごく好きなのに、誰もそう言ってくれないから、自分の好きな気持ちまで否定しいたこともあった」

涙がぼたぼたと音をたてて落ちつづけている。

「逃げ出したくて、いつも変わりたいと願ってた。自分はこんなじゃない。いつかすごくなる。きっと誰かが変えてくれるんだって。ずっと、ずうっと待ってた」

「マリ、マリもういいから」

イヤイヤと駄々をこねるように首をふり、泣き続ける彼女を抱き締めたかった。

「もういいから。もう泣かないでいいから」

そんな言葉じゃなく、身体で彼女を包んで安心させたかった。

ほかの誰がお前を嫌っても、自分だけは絶対にお前を好きでいると、心臓ごしに伝えたかった。

だけど。

「大丈夫だから。もう泣かないでいいから。誰もお前を嫌いになつたりしないから」

こう言つて彼女の頭をなでるのが、ぼくに許される精一杯だ。

「な？顔をみればわかるんだろう？オレも、お前の友達も、お前がなにをしようと嫌いになんかならない。そんな奴いない」

くしゃくしゃと彼女の髪をかきまわしてみた。

マリは、うつむいてされるままになっている。

手から伝わってくる、その柔らかな感触。このまま少し力をいれて少し引き寄せれば、この手に抱くことができる。

ほら、ほんの少し。

「ナリくん」

ふいに、彼女が顔をあげた。

大きな瞳からはもう、涙は流れていなかった。

「あ、うわ、ごめん」

とっさにそう言って離しかけたぼくの手を、マリがぎゅっとつかんだ。

そのまま自分の胸元におしつけ、涙であらわれてさらに澄んだ瞳でぼくをみつめた。

「ごめん、ナリくん」

「へ？」

つかまれたままきわどい部分に触れている右手が気になって、ぼくはひとり視線を泳がせる。

「心臓の、音を聴かせて」

形のよいちいさな耳をぼくの胸にぴたりとつけ、彼女は目を閉じた。

「……こうすると安心するって言うでしょう？すこしだけ、胸貸してね」

その態勢のまま、マリがそう言った。

押し付けられたちいさめの頭は、ぼくが呼吸するたび、それに合わせて上下している。

「……どうぞ」

平静な声でそう答えられたのが、我ながら不思議だった。

彼女が胸に頬をよせた瞬間、ぼくの心臓は確実に一度止まり、その後もものすごい速さで打ちはじめた。

もちろん、ぴったりつけた耳から彼女はその音を聴いていただろう。

手は、まだ取られたままだ。しっかりと彼女の胸におしつけられ、動かすことができない。

たった一枚の布越しに伝わる、ぬくもり。鼻孔をくすぐる香り。

このまま抱き締めてしまいたい。

腹の底からふつつつと沸き上がるその強い想いをなんとか押さえ込んで、左手に持ったままのビールがぬるくなるまで。ぼくはずっとその姿勢でたちつくしていた。

11 彼女の涙（後書き）

ああ青春。

## 12 それでも

「中井……さん？」

煙のむこうから、その声は飛んできた。

「田崎さん」

彼女の声が、うす闇のなかに弾んでぼくの背中をうつ。声の飛んできた方をみやると、「田崎さん」がカウンターの端、ぼくらの位置にすわってこちらを振り返っていた。

女連れで。

「くんばんは」

会釈するマリ。男のとなりにも。

「今夜は男連れか？」

彼女のとなりに座って、ことさらぼんやりと棚に置かれた酒瓶を眺めようとしていたぼくの耳にも、その上機嫌な声は届いた。

「田崎さん」を見るのは二度目だ。いつもこの店で。そしていつも、いやな気分させられる。勝手な言い草だとは十分承知しているが、ぼくのテリトリーを侵略されている気分になるのだ。

横目で、マリを盗み見た。

彼女はーいつもどおりだった。背の高いスツールに浅く腰かけ、

真っ赤な液体を静かに口に運んでいる。

おいおい。お前はあいつが好きなんじゃなかったのかよ。

「中井……さんもデートか。若いっていいねえ」

マリからひとつ空いた端の席でカウンターにもたれ掛かるようにして座りながら、「田崎さん」がグラスをかたむけのんきにそうつぶやいた。

男のくせにやけに白いそのふぬけた顔を、思いきりぶん殴りたくなつた。

「田崎さん、あんまり酔つ払つと彼女に嫌われますよ？」

たしなめるようにマリが笑う。奴の隣りにも、「ね？」と目配せする。

その表情はどこまでもおだやかで、楽しげですらあつた。

「俺、そんなに呑んでないよな？」

甘えるように、男が女に問いかける。

「嘘……。それで3本目」

色素のうすい髪が男のとなりでさらりと揺れ、そのひとは困つたように笑つた。

綺麗な女だな。

思わず、つぶやいてしまった。どこことなく線が細い、「女の人」。

守ってやりたいと、男なら誰でも感じるだろう。

「お前まで、あの子の味方するのか？」

男はおおげさに頭を抱えてみせる。そこで、そろって忍び笑い。いい気なもんだ。両手に華か、色男。

ぼくは、だんだん嫌になってきた。マリはなんでこんな男がいいんだ。

「おい……おい、マリ」

微笑んで彼らを見ている彼女を肘でつついた。

「何？」

「あれは、奥さんだよな？」

自分には関係ないと思いつつ、それでもやっぱり気になった。

どう見ても、田崎と連れの女は「知り合い」や「友人」の関係とは思えない。もちろん、「上司と部下」にも。だとしたら、「夫婦」しかないだろう？

マリは、しばしばくを凝視していた。瓶の底でも覗き込むような真意を探るような顔をして。

決まり悪くなったぼくが少しあごをひくと、

「『彼女』よ」

うなずいて、笑った。

女の子が突然、女の表情になっている。

「彼女って……」  
「お先に」

意味をはかりかねてまごついている間に、田崎は『彼女』を連れて帰っていった。

「ちょっと待てよ。『彼女』ってなんだよ」

ぼくに背を向け、ゆらゆら揺れる入り口の戸をじっとみていたマ  
リに、思わず詰め寄った。

「彼女よ。……愛人とでも言えばいいの？」

振り向きざま、挑戦的な目がぼくを射た。

「何なんだよ。つまり……不倫ってことか？」

「そうよ」

「そうよってお前……」

彼女に言ってもしょうがない事くらい、わかっている。

妻子持ちの「田崎さん」。

それでも、彼を好きなマリ。彼に「彼女」がいても。それでも。

「何なんなんだよ。なんだあの男は。お前、そんな男が好きなのか

「よ」

「好きよ」

まっすぐにぼくをみてマリは即答した。

なにを言われようと、あの男を守るとその瞳は言っているように

思えた。

「……前にも言ったでしょう？しょうがないのよ。だって好きなだもの。奥さんも子供もいて、彼女もいて。わたしが好きになった時にはそうだったんだから、仕方がないじゃない」

「じゃ、なんであの男はお前ともいつしよにいたんだよ。しかも二人つきりで」

声があわずつている。

トオルさんがこちらをうかがっている。

マリがうるさそうにそっぽを向いた。

「いつしよに呑んでるだけじゃない」

「あの男は、お前にも手をだそうとしてるだけだろ!？」

勢いで、言ってしまった。

マリが、ゆっくりぼくに向き直った。すつつと息をすつ仕草をして、大きな両目をゆるりと細めて。

怒っている。彼女はいま、ものすごく怒っている。

平手打ちを食らわしたいほど、でも触れるのも嫌だと思っくらいに怒っている。

「だってそうだろ？妻子持ちで彼女もいるくせに、お前を誘ってるんだろ？お前があいつのこと好きだと知ってて、利用して」  
「ナリくん」

弁解がましくまくし立てていたぼくを、彼女はひとこと封じた。

「……なんだよ」

「あの人は……田崎さんは、正直な人よ」

「正直？何がー」

ちらりとぼくを見る、マリ。

黙るしかない。

「『好きだから仕方がない』って、あの人の言葉でもあるの。田崎さんはわたしを好きじゃない。そんな事わたしが一番知ってる。だって、いつしよに飲んでるのに、夜中に電話なんてしてくるのに、なんて言うと思う？」

「……なんだよ」

「『また喧嘩した。なんであいつに優しくできないんだろっ？』…

…わたしはいつも彼の愚痴を聴くだけ。それだけよ」

「なんで……お前、利用されてるだけじゃないか。全然、幸せじゃないじゃないか……！」

なんでだよ。なんでそんな男を好きなんだ？

なんで、そんな男を待つんだよ？

「ナリくん……」

いつの間にか、ぼくは大声になっていたらしい。

マリがそっと、たしなめるようにぼくの腕に触れた。見回すと、近くにいた何人かの客がこちらを見ていた。

「ナリくん……そんなに興奮しないでよ」

「別に」

唇を引き結んだばかりに、なだめるような微笑。

「ね、ナリくん。愚痴を聴くことだけが、わたしにできることなの。好きなのは、わたし。あの人を必要としているのも、わたし。すこしでも側にいたいと願っているのはわたしの。

あの子の弱さ……こう言っているのいいのかな？好きになったら求めずにはいられない。でも後で悩んじゃう弱さ。それがわたしには必要な。だって、その弱さがなかったら、本当にわたしなんて割り込めないもの。

好きだから……好きで仕方がないからあの子がどんなでも受け止められる。だって、それがあの子だから。わたしは馬鹿よ。なんの、誰の為にもなっていない。でもね」

マリはそこで言葉をきり、ぼくの目をじっとのぞきこんだ。

その冴え冴えとした瞳は、いつかの夜を 彼女が泣いたあの夜を思い出させた。

「わたしは、あの子……田崎さんにだけはそうしたい。この世で一番好きな、あの子にだけはそうしたい」

満ち足りた、凜とした彼女の瞳。ぼくを素通りしてあの男へと向けられている。

もういい。もう聞きたくない。

これ以上彼女の口から、あの男のことなんか聞きたくない。

マリ。

お前は馬鹿だ。大馬鹿だよ。  
でも。

そんな彼女を好きなほうが、一番馬鹿だ。

12 それでも(後書き)

恋とは愚か者のすること。

一理はあります。

### 13 妻と夫

「ただいま」

答えなどないのはよく分かっているが、それでも田崎は玄関でそうつぶやいた。

げた箱の上の飾り時計は、午前2時をさしていた。もう妻も子供たちも寝ているだろう。

そういえば、このところ子供の顔をまともに見ていない気がする。

玄関の端にきちんとそろえられた小さな靴を見て、田崎はふとそう思った。

朝、彼が起き出すところに、子供たちは家を出る。ふたりが通う私立の小学校まで、家からは電車を乗り継いで一時間以上かかった。

一年前所長に抜擢された時、「4LDK、広々とした庭では家庭菜園やガーデニングも楽しめる、緑あふれた郊外で始まる憧れのマイホームライフ!」というキャッチフレーズで売られていたこの家を買った。31歳になったばかりの田崎にしてみればかなり思い切った買い物だったが、妻も働いていたし、なにより養父母がかなりの額を援助してくれたので、決めた。

「せつかくのマイホームだけどな……」

ネクタイをゆるめながら田崎はつぶやき、暗いキッチンへと足をすすめると、冷蔵庫から牛乳を取り出した。

一気に飲み干し、グラスを持ったまま漫然と見渡す。

隅から隅まできちんと整理された室内。染みひとつない真っ白なふきんが、妻の性格を物語っている。

どのくらいここで、夕食をとっていないだろう？  
自問してみる。

半分は仕事だ。残業や部下や取引先とのコミュニケーション。だがもう半分は

「お帰りなさい」

暗がりから、いきなり声がした。

「驚かすなよ……」

妻の綾子が戸口に立っていた。

台所のあかりを受けて、彼女の着ているパジャマが青白く光ってみえる。

「まだ起きてたのか？」

牛乳の白い跡がついたグラスを流しに置きながら、田崎は笑顔をつくっている自分に気づいた。

なんで、自分の女房に愛想笑いしてるんだ？

「先に寝てればいいのに。明日も早いんだろ？今日はちょっと呑んできたから」

「電話があつたわよ。携帯また切ってたのね」

影だけがススツと動くようにして、綾子は音もなく台所にはいつてきた。

「電話？会社からか？」

夫の言葉に、妻はちいさく笑った。

「……何だよ」

「あなたの会社では、いつも同じひとが電話するようになっていたの？」あ……いえ、いらっしやらないならいいです』言う言葉も同じね」

口元だけが、おかしそくに笑っている。

ゆっくりと、田崎は妻に向き直った。

ついさっき牛乳を飲んだばかりなのに、喉が渴いている気がする。

綾子は、田崎と目があうとはりつけていた笑顔をスツと引っ込め、無言で夫がおいたグラスを洗いはじめた。

「……置いとけよ。自分でやるから」

「汚れものが残っているのは嫌なの」

キュツ。

蛇口をしめ、きちんとコップ立てにグラスをたてかける。田崎にむけられた美しいが硬い横顔からは、なんの想いも伝わってこない。怒りも、嫉妬も、疑いも。

「綾子」

「別れましょう」

真っ白なタオルで手をふいた後、彼女はそう言った。

「なんだって」

ほとんど反射的に、田崎はそう答えていた。

「離婚しましょう。私と別れて、その人と一緒にになりなさいよ」

「ちょっと待ってくれ。なに言って……」

言い訳をしようとは思わない。

ただ、行こうとする妻をひきとめたくて、田崎は言葉をついだ。

「綾子、違う。聞いてくれ」

「雅也」

まったく激することなく、むしろ田崎をなだめるように、彼女はほほ笑んだ。

「何年の付き合いだと思ってるの？あなた、わたしに嘘はつけないでしょう？」

「嘘をつくつもりはない。だが」

綾子は手を前にかざし、夫を制した。

「そんな大声を出さなくても聴こえるわ」

彼女は、夫の顔を　青ざめ、怯えているようにも見える顔をすこし見つめ、小首をかしげた。

「ねえ……まさかあなた、私とも別れたくないの？」

怪訝な表情をうかべている。

まさか。原因はあなたなのに？まさか？

田崎は頷くしかなかった。

「なぜ？その人が好きなんでしょう？」

また頷くだけ。

「ちよつと……。私のこともまだ好きだなんて、言わないでしょうね」

訝しむようにそうきいてくる綾子に、田崎は言いたかった。うつむいていた顔をあげ、そうだ。愛している、と。

しかし。

綾子の方がはやかかった。

いつものように。

「私とその人、両方手に入れときたいの？……呆れた。あなたもよくわがままな人ね。ちつとも変わらない。」

私は『妻』よ？そしてあなたは『夫』。あなたは彼女を手に入れているのよね。でも私には？あなたに彼女がいる以上、私には誰もいなくなるのよ？『妻』でしかも子供たちもいるのに。

なぜ私だけが、自分勝手なあなたに合わせなきゃいけないの？」

言葉のつぶてが身体をうつ。

何も言えず、ただ食い入るように妻を見つめ続ける夫に、彼女は明確に区切られた言葉で、さらに続けた。

「知ってるわよね？私は、私だけ見つめてくれる人間と愛しあいたい。どちらも好きなんて言う男とじゃなくね。何故あなただけ自由になっているのに、私はここであなたを待たなきゃならないの？」

「……俺だって…苦しいんだ……」

苦汁のにじむ田崎の声音に、綾子は驚いたようだ。

「苦しい？何故？なぜあなたが苦しむ必要があるの？ふたりを同時に好きになることだって、あると思うわ。あなたはもともと多情な人だし。でもそれで、私を縛れるわけないでしょう？」

爪の先まできれいに整えられた手をさっと払う。

「同時に何人好きになろうが、付き合いおうが、それはあなたの自由よ。でもね、そうなれば私にもその権利があること、忘れていない？あなたはどちらか選ぶなり、選べずグズグズするなり好きにすればいいじゃない。私はもう、あなたを選んでないのだから」

理路整然とした、一点のくもりもない綾子の言葉。

そつだ。彼女はいつも、こうだった。

「俺は……俺にはお前が、必要なんだ……」

みじめに自分がそうつぶやくのを、田崎はどこか遠く、聞いてい

た。

妻は……綾子はただまっすぐに、自分を見つめている。  
ほほ笑んで。

「……私が必要？そう。でも私には、あなたはもういらないの」  
道を見つけたひとはまっすぐだ。  
もう進むだけだから。

「子供は……？俺たちの子供はどうする？」

その言葉で、綾子の口元にはじめて皮肉げな笑みが浮かんだ。

「俺たちの……ね。雅人と綾に決めさせましようと言いたいところ  
だけれど、10歳と7歳じゃ無理でしょう。私たちの事とあの子達  
は関係ないわ。私とあなたが別れても、子供たちはそれぞれの血を  
受け継いでいるのだし、子供であることに変わりはないわよ。……

「しかし子供たちのためにも」  
「子供のため？」

必死でつづけた言葉に、視線の鞭がふりおろされた。

「子供のために……？」

目が、するどく尖ってゆく。

瞳に、今夜はじめて妻の生の感情が噴きあがってきた。  
憎しみと蔑みが。

「子供のために、あなたが今まで何をしてくれたの？休みの日に、お風呂に入れて？思い出したように、ゲームや人形を買ってあげて？あなた、子供たちがあなたをどう思ってるか知ってるの？」

口をつぐむ田崎に、鋭い一瞥。

「知るわけないわよね。最近まともに顔もあわせてないんだから。『パパ今度はいつ来るの？』綾が昨日、私にそう聞いてきたわ」

なにも、言い返すことができなかった。

綾子は自分の言葉が夫にあたえた衝撃をじっくりみてとると、穏やかな表情にもどった。

「分かったでしょう？私にも、子供たちにもあなたは必要ないのよ」

綾子は、清々しい顔をしている。

いつも、そうだったか？

……………そうだ。プロポーズしたときも、自分はただオロオロと彼女の顔をみていた。彼女は当然のように、はじめから決まっていたことのように、穏やかな笑顔で俺を受け入れてただけだった。

そう。彼女はいつも正しかった。

開き直ることも、嘘をつくことも、謝ることすらできない。

もう、駄目なんだ。

13 妻と夫（後書き）

あゝあ。 やっちやっ  
たね。

## 14 彼女が選ぶもの

「おい、聞いてるか？」

「……え？」

騒がしいまわりにたいしてではなく、入り口の方をみていたばかりに、新さんはため息をついて見せた。

「お前ね……。まあいいや」

ヤレヤレ。

あきらめ顔で首をふり、ウォッカのストレートを飲み干す。

つねに的確に対象をとらえるプロの眼は、いまぼくが他人の話しを聞ける状態にはないと判断したらしい。

「彼女、か」

入り口の扉を、正確に言えば扉の向こうをじっと見つめるぼくの耳に、彼のつぶやきは届かなかった。

今日、ある賞の発表があった。

一般にはほとんど知られていないその賞は、建築設計にたずさわる者なら一度は挑戦してみる大手建設会社のデザインコンペで、佳作でも50万円の奨励金がもらえる。優秀賞ならそのデザインで実際に建てられるのだ。

その優秀賞のひとつに、ぼくのデザインが選ばれた。

ポストに入っていた白い封筒。どうせ無理だからと、出したことを忘れかけていた。

たまたま撮影帰りに寄った新さんがそれをひょいっと取り上げ、

「ラブレターにしちゃ地味だな」

さっさと封を開き、有無をいわず突き付けられた一枚の紙切れ。

「呑みに行きましょう」

ぼくはそう言っていた。

「すぐ行きます！」

ボタンッ

蹴破る勢いで扉を開け戻ってきたマリは、携帯に向かってそう言いながらカバンを引っむや駆け出そうとした。

「             どっ行くんだよ」

呼びとめるぼくに、首だけこちらに向ける。

「ナリくんごめん！お祝いは今度ゆっくりさせて」

もう彼女の心は駆け出している。ついさっきまでぼくに向けられていた透明な瞳は、もうない。

おめでとうナリくん。すごいじゃない！

惜しみない賞賛の言葉をくれたその唇は、瞳は、いまどこに向か  
っている？

「行くなっ」

眼をおおきく見開いて、彼女がぼくをみた。

それから、その細い手首をつかむぼくの手を。

「行くな」

低い声を、自分がこんなにも低く、威嚇するような声をだせると  
は思わなかった。

「……ナリ……くん？」

マリの大きな瞳には、すこしばかりの怯えと困惑とが見えかくれ  
していた。

「どうしたの……？手、離して……？」

周囲の客の目を気にしてか、意識して笑顔をつくるマリ。  
でもその瞳も笑顔も、ぼくに向けられたものじゃない。

「ね、どうしたのよ？」

ぼくの手から、彼女の白い手がするりと抜けてゆく。

「今日は、ごめん。ちょっと急用が」

「あいつが呼び出したんだろ」

あの男のための言い訳なんて、金輪際聞きたくない。  
絶対に。

「..そうよ」

彼女はやっと、ぼくの顔を真正面からみた。  
その挑戦的な光り。  
あの男のための。

「あの人が呼んでるのよ。だから？」

ぼくは今、とても醜い顔をしているだろう。  
マリの後ろで、新さんがこちらをうかがっている。  
止めておくと、その目は言っている。

「行ってどうするんだ？あの男のくだらない愚痴きいて、慰めてやるうって？利用されてるだけなのに？お前を好きでもない男なのに！？」

バツシーンッ

そういえば、今夜ぼくらはめずらしく、トオルさんの店の2階で飲んでいた。テーブル席ばかりのそこは天井も高く、いまその空間いっぱい、マリがぼくの頬を打った音が響き渡った。

「わかってる、わかってる、解ってるわよ！！」

わんわんと彼女の突き刺さるような声も響いている。

「言われなくてもよく解ってるわよ！あの人が好きなのはわたしじゃない。わたしがどんなに努力しても、あの方はわたしなんか見向きもしない。絶対に……！………だけど………」

彼女の顔がゆがんだ。

唇を、きつく、きつく噛みしめ顔を真っ赤にして、両目から大粒の涙をみるまにあふれさせた。

「そんなこと……言わなくてもいいじゃない……わたしが、一番よく知ってるのに………なんで、あなたまで言うのよお………」

いま、彼女を泣かせているのは、自分なんだ。

本当に情けないことに、その時ぼくはただぼーっと突っ立ったまま、泣いている彼女を見つめることしかできなかった。

絶対にやらないだろうと思っていた事を、いま、自分はしているのだ。

ただそのことに驚いて、打たれた頬をさすりもせず、階段を駆け降りてゆく彼女のあとを、追おうとさえしなかった。

ぼくは、誤解していた。

「彼女」をつれた「田崎さん」を見ても、笑っていたマリ。それでも好きだと、しょうがないのだと言っていた。だから、割り切っているのだと、勘違いしていた。

彼女はいつも血を流していたのに、  
体中で悲鳴をあげていたのに。

「待つ……」

「お前は行くな」

ようやく金縛りがとけて駆け出そうとしたぼくの肩を、新さんがつかんだ。

頬を打たれた間抜け男に集まった周囲の視線はすでになく、客たちはそれぞれの凧いだ風景のなかへと戻っていた。

「お前は行っちゃいけない」

分かるだろう？

大人の新さん。トオルさんもそうだった。

分かっています。

ぼくは口の中だけでそうつぶやき、うつむいた。

テーブルの上の白い封筒が、受賞を知らせた封筒のその白さが、なんだかすごく、情けなかった。

14 彼女が選ぶもの(後書き)

ああ青春。

## 15 彼女と彼が選ぶこと

「……昔話をしてやるうか」

バーにしては明るい、しかし居心地は悪くないその空間に、男の低い声はとけていった。

マリは、ちいさく頷いた。

すぐ隣にいるのに、田崎の声はとても遠くからきこえてくるようだった。

”Poursuite”

いつものバーの、いつもの席にいた田崎の顔は、泣いているようだった。自分もついさっきまでは目尻に涙をためていたのに、駆け寄って抱き締めてやりたくなったほど、その瞳は頼りなくゆれていた。

「出ようか」

ギネスを半分以上残して、田崎がいきなり立ち上がった。

「今夜は、そんなに暑くないな」

店をでて、人波の中をゆっくりと進みながら、田崎が言う。

いつもの柔らかな笑顔も、なにも、その面にはない。

小柄なマリは、数十センチ上にある彼の顔を、そっと見上げた。

いますぐ来てくれ。頼むから。

電話のむこうの声は、震えていた。いままでとは違うその泣いているような声にせかさね、親友であるナリヒラと喧嘩してまで駆けつけたのだ。

何があったんですか……？

マリは、田崎の白い顔をじっと見つめた。

「……何？」

視線に気づいたのか、困ったような表情がこたえる。

「昔話、してくれるんでしょう？」

まっすぐに彼の目を見返す。

田崎はいつも、マリの本気なまなざしを優しく笑って受け止め、受け流していた。

すくなくとも昨日までは。

「ある、馬鹿な男の話」

田崎はマリから目をそらし、口元でつぶやくように話しはじめた。

「そいつはまだ子供で、それでも好きな子がいて、付き合っていた子供ができた。

まだまだそいつは若かったし、彼女はそれ以上に幼かったが、生まれてはじめて本気で他人に頭をさげて、一緒になろうとした。

認めてくれなかった。親も、法律も。

そいつは彼女とわかれて、別の子と付き合いだした。お互いに、

子供のことは忘れて。

二回、別れを繰り返した。

やつは他の子と付き合うたび、彼女を思い出した。

そんな自分に嫌気がさす。

別れを切り出すのは、いつも自分の方だったから。

それでも彼女を求めてしまうから。

いつも。いつも。その子しかいないと思ったから。

二度目に子供ができた時、法律は彼らを許してくれた」

妻が、出て行った。

子供たちも連れて、去っていった。

マリは、電話の向こうでそう言った田崎の、妙に淡々とした声を思い出していた。

自分の横でいま、どこに行くのかもわからず、ただ足を前に動かし進んでいる、彼。

当然の報いかもしれない。「悪い」のはこの人だ。奥さんも、子供もいるのに、彼らを愛しているのに、「彼女」がいる。

そして彼女もいるのに、わたしをこうして呼び出している。

この人は、悪い。奥さんは、きっと正しい。

でも、とマリは思った。自分より頭ひとつ高い田崎を見上げる。

わたしの前で、この人が泣いている。痛い、痛い、血を流している。わたしは、それなら、ただ………。

「わたしに、何ができますか？」

「……ん？」

マリが隣にいることに、はじめて気づいたというように田崎は立ち止まり、彼女を見下ろした。  
その視線をまっすぐ受け止める。

「どうすれば、田崎さんを幸せにできますか？」

田崎の瞳が、ゆれた。

「田崎さん」

「公園がある」

顔をゆがめ、目をそらした田崎がちいさくつぶやいた。

確かに彼の視線のさき、マリたちから数メートル先のビルの隣に、小さな忘れさられたような公園があった。

「田崎さん？」

マリが目線を田崎にもどしたときには、彼は数歩先を歩いていた。  
仕方なくマリも後を追う。

「飲むか？」

公園の入り口にある自動販売機の前で立ち止まり、田崎がきく。  
販売機の白い明かり。  
その光りに照らされた白い顔。

「はい」

ガシャン、ガシャン。

田崎は缶コーヒーをふたつ片手で持って、そのまますたと中へ入っていく。

マリはその背中を追う。  
公園にひとつしかないベンチに並んで腰かけてから、ふと気がついた。

右手の人差し指と中指の間には、常時煙草をはさんでいるような田崎が、今夜は一本も吸っていないことに。

第二の皮膚のように板についたスーツではなく、ジーンズにポロシャツ姿の、仕事以外の、素の彼を初めて見ていることに。

「なあ」

ぼんやりと前方を見ていた田崎がつぶやいた。

「はい？」

その横顔をちらりと見ながら、マリはなぜか頬がほてるのを感じた。

コトン。

ふたりの間に少しだけあった隙間に、田崎が飲んでいた缶を置く。マリを見つめる。

「なんで、お前は俺を好きなんだ？」

熱かった頬が、いつきに冷えた。

「……え？」

わたしはいま、笑おうとしているのか。

頬の筋肉がひきつるのを感じて、マリは思った。

「なんでだ？」

田崎はくりかえし問う。

「田…崎さん？なに言ってる」

「俺の、どこが好きなんだ？」

もう田崎の瞳は揺れてはいなかった。いつものしなやかさを取り戻した視線で、マリの瞳をとらえる。

目をそらしたのは、今度は彼女の方だった。

こくと一息飲んで、ゆるゆると自分のコーヒーを田崎の缶のとなりに置く。

「いつから……」

マリの紅い唇がふるえ、その震えを伝えるような細い声がもれる。

「いつから……知ってる……」

後をつづけられない。

恥しさから？

わかるはずないと、安心していったから？

あんなに態度にでていたのに。瞳から、唇から想いがあふれ出て

いたのに。

「最初は、なんとなく」

そらしたマリの視線をもつ一度とらえ、田崎は、いつもそうしていたように、ふわりと微笑んだ。

「気がついたら、いつも隣りに俺を見上げてるお前がいた」

「なん……で、あのっ……でも…… ごめんなさい」

見つめられるのに耐えられず、マリはうつむいた。

「なんで、謝るんだ？」

不思議そうにきく、田崎。

マリはただひどくうろたえて、田崎の顔なんてまともに見られなかった。

知られてしまった。

ずっと隠しておこうと思っていたのに、知られてしまった。

「……好きになるんじゃないかった。あなたを……好きにならなければよかった」

うつむいたまま、声をふるわせマリは言う。

逃げ出したい。

もう何でもいい、この場から逃げられるのなら、なんでもする。

いつも愚痴をこぼす彼を受け止められるのはわたしだと、勝手に思い込んでいた。わたしだけがそれをしていいのだと。

母親のように、恋人のようにそうできることが、わたしの存在価値だと思っていた。

彼は、ちゃんと知っていた。その行為の裏にある心を、彼女や奥さんとおなじ想いを、ちゃんと見抜いていた。

いますぐ走ってどこかに消えてしまいたい！

「俺は、うれしかった」

まあるい、優しい声がきこえた。

顔をあげると、すこし赤くなつたように見える田崎の笑顔がすぐ側にあつた。

「田崎……さん……？」

ほづけた表情で、マリはただ、大好きなその顔をみつめることしかできなかった。

「俺は、うれしかったよ」

白い、いつもこっそり見上げていた笑顔がすぐ目の前にある。

マリは、いつの間にか微笑んでいた。

たった一度だけ触れたことのある前髪が、ふわりと彼の額にかかっている。

もしかしたら、自分のよりも柔らかいんじゃないかと思ったその髪の毛の感触が、指先にまざまざとよみがえるのを感じた。

「中井……マリ。俺のこと、好きか？」

笑顔をすつとひっこめて、睨むように自分をみつめる瞳がある。

なぜ、こんなにもまっすぐにわたしを見つめるのだろう。

「俺のこと、好きだよな？」

この声が、好きだった。

低く、時折かすれることもある、甘い声。

「なあ」

ぼんやりと見開かれたままのマリの瞳を、田崎がのぞきこむ。

この目が、大好きだった。

目の形だけをみるととても可愛らしいことに、何人が気づいているだろう。

好きで好きでたまらない彼の目が、いま、わたしだけを見つめている。

まっすぐに、わたしだけを。

「マリ？……聞いているか？」

なんの反応もしない彼女にじれたのか、田崎はしばしの逡巡のあと、その細い肩にそっと触れた。

びっくりと身体をふるわせ、マリは自分の肩に置かれた田崎の手をみた。

整った、けれど女の手とは決定的に異なる、彼の大きな手。

良く手入れされた爪。

先細りの指。長い。

触れたくて、この手に触れるためなら何でもする。何度、胸のなかでそう叫んだろう。

大好きな、大好きな彼の手だ。

「マリ？」

この声で、名を呼んでほしいと、何度願った？

ただ見つめかえすだけのマリに、田崎はため息をひとつつき、つかんだ肩をわずかに揺すって哀願するように言った。

「マリ、答えてくれ。……頼むから」

この声が、

この瞳が、

この手が、

この人のすべてが、

「好きでした。ずっとあなたが好きでした。だって、好きなんだもの……好きに、なっちゃったんだもの……しょうがないじゃない……」

泣きたくなんかない。

いま泣いては駄目。いまだけは泣いちゃいけない。

こみあげる涙を抑えきれなくて、マリは唇をきつく噛んでうつむいた。

「……泣かないでくれ」

戸惑った声がきこえる。

「見ないで……ください。わたしを見ないで。ずるいから……ずるいわたしを見ないでください……」

嗚咽を押し殺し、うつむいたままのマリ。

と。

身体をなにかに包まれた。

なにか、堅くてあたたかいものを額に感じる。

「ずるくなんかない」

田崎の声が、その広い胸を伝ってマリの耳にここちよく響いた。

「お前はいつもまっすぐだ。まっすぐ前に進もうとしている」

温かい肌。

布ごしに彼の体温と、力強い心臓の音が伝わってくる。

「こは、とても気持ちがいいよ。」

ふつつとちいさく吐息をついて、マリはおずおずと田崎の背中に手をまわした。

「……好きでした。田崎さん。ずっとあなたが好きでした。ごめんなさい」

額を彼の胸におしあて、直接自分の声が彼のこころに伝わるようにと、マリは願った。

「謝るな」

低くつぶやく、田崎。

やっぱり、田崎さんは男の人だ。

じよじよに力がこめられていく彼の腕。そのあまやかな重みを感じながら、マリは安堵のため息をついた。

「……………好きだ……………」

彼女のこと、奥さんや子供のこと、なにも考えられなかった。

## 16 届かない

「おかけになった電話は、電波の届かないところにあるか、電源が」  
ブツッ。ツーツーツー……

電話を切ったのに、無機質な合成音声が耳の底でこだましている。もう何回となく聞いているせいだろうか。

ぼくは、役立たずの携帯電話を放り投げ、隣りと マリの部屋と接する壁にもたれ、目を閉じた。

アパートとはいえ防音のしっかりしているぼくらの部屋では、お互いの音はほとんど伝わってこない。こうして壁につけた背中には、その無言の冷たさみたいなものだけが伝わってきて、隣りの、彼女の不在がいつそう重く感じられた。

昨夜、マリは店を飛び出して行った。

明け方ちかく、明らかに酒以外が原因でどんより重い頭をかかえて家路をたどったぼくは、いつもの小路与顔をあげ、隣りをみた。

カーテンできっちり閉ざされた暗い窓。その向こうで彼女が寝ているはずはない。

フリップ型の携帯を、開いては閉じるといふ無意味な動作を何回かくりかえしたあと、ぼくは彼女の携帯に、電話をかけつづけた。出るわけがない。いや出てくれと願いながら、何度もなんども

そして。

若さというのはすごいもので、どんな悩みや苦しみがあっても、身体を眠りへ押し流すらしい。ぼくはいつの間にか、携帯を握りしめたまま眠っていた。

目覚めた時日はすでに高く、ぼくはぼうつとした頭のまま、また電話をかけた。

返事は昨夜と同じ、空しい合成音。

たぶん、彼女はまだ、眠っているのだろう。  
ため息ににたつぶやきが、口からもれる。

閉じた眼裏に、微笑んで眠る。そう。いつか撮ったあの写真のような、彼女の顔が浮かんだ。

ひとりではないだろうけれど。

告げることもせず決定的に終わってしまった恋は、どうなるのだろう。  
ろっ。

ただ、好きだった。

ただ、その声を聞いていたかった。顔を見ていたかった。

好きだと告げる勇気もなく、ただ見ているだけだった。ぼくは、いまこうして、「待つ」ことしかできない。

もちろん、待っていたところで幸せそうな ぼく以外の男のおかげで幸せそうな彼女を、見つけるだけだろうけど。

それでも、ぼくはこの場から動けなかった。

この部屋を飛び出したところで、どこまでも、どこまでも彼女の幻影は追いかけてくる。

もしかしたら電話がかかってくるかも、たずねてくるかもしれないという馬鹿な考えが浮かんで、ここから一歩も動けないのだ。

なんで、彼女を好きになっただろう。

なんで、好きだと言わなかったんだろう。

答えのない問いが、頭の中をぐるぐるぐるまわっている。

こんなに苦しむなら、好きにならなければよかった。

自分でも情けなくなるほど弱々しい声が、内側から聴こえてくる。

でも！

熱く、にがい言葉が喉を押し上げる。

でも、好きになってしまった。

気がつけば、彼女を目で追っていた。

彼女と出会えて、ぼくは幸せだったはずだ……！

両腕を胸のまえでしっかりと組み合わせ、自分を抱き締めた。身体がひとりでに震えだす。

逃げ出したい！

そう叫ぶ。

逃げちゃ駄目だ。逃げたって、どこにも、何も無い！

そう叫ぶ声もする。

両腕にさらに力をこめ、10本の指を両肩にくいこませ、ぼくは海老のように丸く、ちいさくなった。

そうしなければ、崩れてしまいそうだったから。

16 届かない(後書き)

青春。青い春。いつも迷っているばかり。

17 拒絶

ピンポーン

チャイムが鳴った。

「ピ」の音が聴こえた瞬間跳ね起きたぼくは、玄関へつつ走り、誰もせず扉を開けた。

「……びっくりした」

マリが、コンビニのビニール袋をさげて、立っていた。

「帰ったのか」

ドアノブに手をかけたまま、ぼくはつぶやいた。

寝不足の目には彼女と、その後ろの妙に白い陽の光はきつすぎる。

「おはよう。あ、おそようか」

おどけたようにそう言い、コンビニの袋をかかげてみせる。逆光で、彼女がいまどんな表情をしているのかは、確かめられなかった。

「お祝いの続きしよう」

ノブに手をかけたまま動こうとしないぼくの脇をすりぬけ、マリは部屋にすたすたあがった。

「ナリくん、ビールでいい？それともチューハイ？アテもね、結構買ってきたよ」

あくまで明るい声でそういいながら、宴会よろしくテレビの前のテーブルに、次々と酒やつまみを並べはじめる。

さっき、彼女が横をすりぬけた時。いつもとちがう香りがした。

いつまでも玄関に立つたままのぼくに、マリが小首をかしげる。

「なにしてるの？早くおいでよ」

「寝てきたのか？」

凍りつく、表情。

ぼくも、彼女も。

後ろ手で扉を閉め、玄関に立つたまま、ぼくは繰り返した。

「あいつと寝てきたのか？そのための『お祝い』じゃないのか？」

チューハイを手にしたマリが、笑ったのが見えた。

「何がおかしい」

自分でもうまく説明できない衝動が、腹の底からわきあがってきた。

「何がおかしいんだよ!？」

突進して詰め寄ったぼくを、彼女はおおきく見開いた目でみつめた。

違う。笑ってるんじゃない。

怯えたように視線だけぼくにはりつけ、彼女が首を横にふっている。

妙にさえざえと光る瞳。

目の下の隈。

白をとりこして青くすら見える顔の、そこだけ紅い唇が奇妙にゆがんで、笑ったように見えたのだ。

「『…あれ?』って言ったの」

ゆがんだ唇から声がもれる。

「……なんだって?」

「田崎さんがね、『あれ?』って言ったの。……そんなはずない。何故だ。そんな顔してた……出来なかったの!」

笑いをこらえているような それとも、泣くのをこらえているのだろうか?

「並んで、そのまま眠った。裸で、なにも、しないで。朝起きたらね、電話してたの。」

『待つてくれ』

……あの人は、電話の向こうにそう、言った。わたしが起きたのに、気づい、て……わたしの顔をじっと見て……」

唇のはしが震えている。

彼女の顔が、さらにゆがむ。

「身体はね!……ちゃんと、身体はわかってるのよねっ……気持ちがついていかないと、駄目なのよ……! 『ごめんな』って……!」

にぎったこぶしを唇に押しつけ、嗚咽をこらえている。

涙でいっぱい絶望的な瞳を見開いているのに、マリは泣こうとしない。

彼女は、笑おうとしている!

「マリ……」

「ふられちゃった!」

差し出したぼくの手は、拒まれた。

笑顔で。

「ふられちゃった、ナリくん。奥さんも、彼女もいない。いまだっ!て狙ってたのに、ふられちゃった……!」

さもおかしそくに彼女は声をあげて笑った。

笑いながら目の前にあったウィスキーの瓶を手にとり、ぶちりと封を手で開け無造作にグラスにそそぐと、乾杯、というように掲げてみせた。

「泣けよ」

掲げたそのグラスを、彼女の手ごとひつつかんだ。  
あらがう、彼女。  
ウイスキーが飛び散る。

「泣きたいなら泣けよ。なに我慢してんだよ!？」

彼女は必死に身をよじって逃げようとする。  
スカートがまくれあがり、真っ白な太もがむきだしになるのも  
かまわず、全身で、ぼくを、すべてを拒絶している。

「離しつてよお……!」

「泣けっ!」

パンツ

ぼくの右手が、鳴った。  
彼女の頬を打っていた。

「……我慢するなよ……」

ゆるゆると彼女の左手が上がり、ぼくに打たれた頬にふれる。  
見開かれた両目。

「マリ……?ごめんな……」

おずおずと差し出したぼくの手は、拒まれる。  
いつも。

「泣いてどうなるのよ!」

スイッチが切り替わったかのように、彼女はぼくの手を勢いよくはねのけ、火のような眼でにらんだ。  
まるで、憎んでいるように。

「泣いて、どうなるのよ!泣いて、なにか変わるの?わたしはふられたの!あの人はわたしを拒んだの!わたしは大声でなければ、泣きわめれば、あの人はわたしを抱いてくれるの?好きになってくれるの?」

顔がくしゃりとゆがむ。

「違う……でしょう……?いくらわたしが泣いたって、あの人はわたしを見てはくれないでしょう……?見苦しい、だけじゃない……泣いても、叫んでも無駄なんだから……」

血を吐くような、言葉だ。

ぎゅゅつと胸を引き絞るようにつかみ、マリが叫んでいる。  
言葉とは裏腹に、両目から涙をふきこぼしている。

「田……崎さん……がっ……」

「怖いのか?」

ぼくは、なんでこんなに冷たい声をだしているのだろう。

彼女がびくりと身体を震わせ、涙でぐしゃぐしゃになった顔をあげた。

「なに恰好つけてんだ？なに逃げてんだよ」

なぜ突き放すようなこと言ってるんだ？

なぜ前みたいに抱きとめてやらない？

そんな心の声とは裏腹に、ぼくはどこまでも冷たく、まるで獲物を追い詰めるようにマリを囲んでいった。

「お前、ふられたんだろ？泣いてどうなる？なに言ってるんだよ。苦しいんだろ？拒まれて、ふられて悲しいんだろ？吐き出せよ。腹の中のもの全部、吐き出しちまえ。」

お前、ほんとは怖いだけだろ。泣いて、叫んで自分の感情が爆発したあとが怖いだけだろ。逃げるなよ」

涙にぬれた瞳が、おおきく、おおきく見開かれる。  
ぼくをおそれるように。

「逃げてなんかい」

「逃げてんだよ。いつつもおきらめて、『なにやっても結局無駄だよね』って、最初からなにもしてないじゃないか。そうすりゃ楽だもんな。言い訳できるし、じっとしてりゃ、傷つかずにすむもんな？」

「ちがつ…違うよ……!!」

「違う。お前は怖いだけだ。負けるかもしれない。失うかもしれない。それだけが怖くて、逃げまわってる。そのくせ独りで悲し

んでる。『なんでわたしばかり』って。

お前、自分の感情に向き合うことさえ避けてるだろ。

……嫌なんだろう？いまのままじゃ、嫌なんだろう？嫌なら変えるよ。何度でもぶつかれよ。諦めるなよ。おまえの好きなんで、そんなもんかよ？ 逃げるなっ！」

マリのすぐ横の壁を打ちすえた。

腰をあげて逃げ出そうとしていた彼女は、自分をかばうようにして身をすくませ、耳をふさいだ。

ぼくは、そのきゃしゃな手をつかみ、無理やりひきおろした。

青ざめた彼女の顔を両手ではさみ、怯えてゆれる瞳をみすえる。

「逃がさない」

心が、凶暴な想いに支配されていく。

それはいま、彼女の心の一番もろい部分、彼女よりもぼく自身が大切に守ってきたところを、ひきずり出そうとしている。

彼女は、弱い。

いつも斜にかまえようとし、傷つくのをおそれて他人と距離をとろうとする。強がってばかりいるのは、そんな弱さの裏返しなのだ。

「絶対に、逃げるな。おまえが逃げようとしても、おれが逃がさない」

ぼくの手を振りほどこうと、もがく彼女。  
止まらない涙。

「見てみるよ、マリ。いやだ、変えたい。その気持ちから逃げずに

向き合えよ。

いやだと思つてなにが悪い？欲しいと思つてどこが悪い？『見苦しい』自分を認めるよ。ぶつかれよ。自分の欲しいもの、つかんでみるよ。諦めるなよ……。

欲しいんだろ？それがどうしても欲しいんだろ？逃げてでも欲しくなく、ならないんだろ」

ガクガクと彼女の頭がゆれうごく。

ああ違う。

ぼくが動かしているのだ。

彼女にこの震えを伝えようと、この腹のそこから噴き上がる、熱い、苦いなにかを伝えようと、腕をがむしゃらに動かしていたのだ。

「逃げるくらいなら、最初から欲しがるなよ………！」

目の前にいるはずの彼女が、ぼやけて見える。

ばらばらと音をたててこぼれ落ちる、何かがある。

ちがう、そうじゃない。

逃げていたのは彼女だけじゃない。

彼女に向けていたはずの言葉のつぶては、いつの間にかぼく自身にぶつかっていた。

想いを、伝えられなかった。

拒まれるのが、居心地のよい彼女との関係を失うのが、こわかった。

欲しかった。彼女が好きだった………。

マリが、泣いている。  
引きずりだされた心が、むきだしの心が、悲鳴をあげているのが  
聞こえる。

そして。

ぼくの声もきこえた。  
はじめて彼女の反応など気にせず、本心をさらけだして、大声で  
叫んでいる。  
嫌われるとか、もうそんなんじゃないかって、ただ想いを吐き出して  
いる。

逃げたくない。

負けたくない！

彼女は、ぼくは、崖っぷちまで追いつめられて、やっとそう、叫  
べたのだ。

## 彼女

「久しぶり」

彼女のうしろで扉がパタンと閉まった。  
うす闇の中、ゆっくりと白い影がうごく。

「元気だった？」

手をあげてこたえたばかりに、綺麗な、紅い唇がゆったりと左右に  
ひろがった。

いつもの店の、いつもの場所。

二年前とすこしも変わっていないように見える、バーテンダーの  
トオルさん。

彼女の前の、赤い色も変わっていない。ぼくの前にギネスビールの  
小瓶があるのも。

「カメラマンさんは、その後どう？」

彼女が マリが、あの透明な瞳にいたずらっぽいやい色をふくませ訊  
いてくる。

「この前、雑誌に載ってたよね？ちゃんと名前入りだった。……綺麗  
だったな……」

「どうも」

我がことのような、彼女の満足げな笑み。

ぼくの顔はすこし赤くなっているだろう。

「そっちは？いまじゃ店の顔だろ？」

ぼくの言葉に、彼女はくすぐったそうな顔をした。

「社員一年目にしてお局様あつかい。バイトの子がね、『すっごい怖い人って聞いてましたー』なんて言うのよ？」

くすくす笑う喉の奥にすべりこむ、赤い液体。

こうして久しぶりに彼女とここに並ぶと、確かにあれから二年たったのだと感ずる。

大学卒業後、ぼくとマリはそれぞれの道を歩んでいた。

彼女は、学生時代にバイトしていたレストランの社員として。

ぼくは、カメラマンの卵として。

彼女はすこし、いや。だいぶ変わった。

接客業特有の……なんとというか、空気のようなものをまとっている。その長い髪、白い頬や紅い唇からそれが、ふうわりと漂ってくるのだ。

音を立てないよう、滑らすようにグラスを置く細い指には、ぼくの知らない指輪が光っている。

そうか。ぼくはこんなにも長い間、彼女から離れていたのか。

彼女のまわりの、懐かしいがどこか遠い空気が、その事実をぼくに教えた。

「どうしたの？ナリくん。なにか話があったんじゃないの？」

マリが小首をかしげ、ぼくの顔をのぞきこむ。

ああ。この透明な瞳は変わっていない。

「隣りとは…うまくいつてるのか？」

かつてそうだったように眼をそらし気味にして、ぼくはそうつぶやいた。

「え？」

よく聞こえなかったらしく、彼女が眉をよせて聞き返してくる。

「いや、ちょっと心配になってさ。お前のことだから、新しく越してきたやつと喧嘩でもしてるんじゃないかと俺は……」

おおげさに胸に手をあて、眉をよせてみせた。

彼女は馬鹿にして、と口調だけ怒り、笑った。

ぼくは、卒業を待たずに引越した。

その頃から写真に本腰をいれ、師匠である新さんのスタジオに転がり込んで、そのまま居着いたせいだ。

が。

「長い間、お世話になりました」

そう言っで見送ってくれた彼女から、離れたかっただけかもしれない。

「どうだ？『一人暮らし』は」

ぼくの知らない誰かと、楽しくやってるかい？

茶化して問うたぼくに、マリはまじめな、真っすぐな瞳をむけてきた。

「この間ね、田崎さんがうちに来たの」

「……え？」

「久しぶりに一緒に飲んで、その後あの人がうちに来たの」

思わず逸らそうとした瞳を彼女はしっかり捕らえ、一言ひとこと、ぼくの中に刻み込むように告げた。

「田崎さんに、抱かれたわ」

透明な瞳がぼくを突き落とした。

「あつたかい……」

「……うん……？」

頬をよせた裸の胸から、男の声がマリの耳にここちよく響いた。

「なにか言つたか？」

大好きな手が頭を優しくなで、低い、すこしかすれた声で聞いてきた。

「重くないですか？田崎さん」

いま自分の声に色をつけるとしたら、うす紅色だろう。

耳にとどいた自分の声もかすれているのに気づき、マリはほんの少し、頬を染めた。

頭をこころもちあげ、自分の下にいる田崎を見つめる。

彼はいま、確かにここにいる。

頬をつねるかわりにマリは、田崎の予想以上に広い胸や肩にそつと触れた。

大丈夫。ちゃんと、ここにいる。

ため息をひとつついて、彼の胸の上へと帰る。

田崎はなんだか安心したような表情を浮かべて、まどろみ始めている。

寄せた耳から伝わる鼓動。

その安らかな音をうとうとと聴きながら、それでもマリは、時折目をこじ開け顔をあげて、田崎の顔を見つめた。

目を閉じたら。

このまま眠ったら。

朝がきたら。

彼はいなくなる。

そしてもう二度と、わたしとこうする事はないだろう。

この穏やかな寝顔は、いましか見られない。彼とこうして、二人きりの時を過ごすことは、もうない。

マリは、今夜田崎と飲んでいた時、家に誘って彼が受けた時、そして白い顔がああの夜のようにゆっくりと近付いて来た時からずっと、そう思っていた。

田崎が初めてではない。

ただ、あの夜、閃くように彼の気持ちを知り、いや、悟らされてからもずっと、不成功に終わったふたりの時間が胸に残っていた。彼が「出来なかった」からこそ、およそ叶わぬものと知りながら、この人に抱かれたらどんなに幸せだろうと、ひとり胸を焦がしていた。

それが今夜、実現したのだ。

いつものように電話が鳴って、声が聞こえてきて、飲んで抱かれた。

キスをするのは簡単だと、この人が教えてくれた。  
あの夜の公園ではじめて唇をあわせ、照れ隠しかなにか、自分でも解らなかつたけれど、

「…何故？」

ため息のようにつぶやきが、濡らされた唇からこぼれた。

「したかったから」

いちばん簡単な、いちばんわかりやすい答え。  
たぶん、いま隣りで眠るこの人に同じようにたずねても、そう答えらるだろう。

この人は、わたしを好きじゃない。

不思議と、胸をえぐるような苦しみや悲しみはわいてこなかった。

ああそうか。この人は、わたしを好きじゃないんだ。

ずっと必死で探しつづけていた答えは、最初から目の前にあった。  
自分だけが見えて 見ようとしなかっただけ。

抱かれないまだからこそ、それがわかったのかも知れないけれど  
……………。

わたしは、田崎さんが好きだ。この白い胸に、腕に、広い背中にずっと触れていたい。

でも。

この人は、わたしを望まなかった。わたしでは、彼の寂しさや渴きを癒すことができなかった。

田崎の温かい腕の中で、まどろみながらそう悟って。いまやっと、マリは息をつけた。

「……諦めたのか？」

耐え切れなくなるまで待って、ぼくはそう訊いた。  
ほほ笑む、マリ。  
首は横にふられている。

「好きよ。いまでも大好き。自分でも時々どうしようもなくなるくらい、あの人が好き」  
「じゃ、なんで……」

透明な瞳がぼくを捕らえる。

「だってわたし、解っちゃったんだもの」

おどけたように肩をすくめて見せる、マリ。

離れたのは、距離だけじゃない。

グラスに残ったギネスを一気に飲み干して、ぼくはため息を隠した。

彼女はなにかを越えたのだ。ぎりぎりの崖っぷちに立たされた時、彼女はそこを知らぬ間に飛び越えみごと切り抜けたのだ。

ぼくがまだそこで、下をのぞき込んだままなのに。

ぼくは逃げた。結局彼女になにも言えないまま、逃げた。

彼女は、逃げなかった。

それがいま、ぼくらの距離をつくっている。

ずんぐりした瓶からギネスをグラスにつぎたし、ひとくち飲む。

ぬるくなっていた。

彼女の満ち足りた笑顔を横目で盗み見る。

ひとつなにかを成し遂げた者だけが持つ、内側から照り輝くような明るい顔を見ているうち、胸底からなにかが沸き上がってきた。

負けたくない。

逃げたくない！

「なあ、好きだったんだぞ」

一声、押し出した。

声は震えていなかった。

「ずっと、お前が好きだった」

………確かに簡単なことだ。

出会ってからずっと溜めていた想いを吐き出したぼくは、いつか彼女の告白を聞いた時のように、無性に笑いたくなってきた。

なんで今までこんな事でグチグチ悩んでたんだ？田崎とかいう男に先を越されてまで。

「好きだったんだ……」

息とともに大きく吐き出し、ずっと腹の底にしまっていたこの一言を、彼女に届けた。

マリは 彼女は、小首をかしげてぼくを見ていた。

困ったように眉をわずかにひそめて。考え事をする時いつもしていたように、人差し指をそのすこしとがり気味のあごにつけて。

「ナリくんじゃ、ないんだけどな」

小首をかしげたまま、彼女がつぶやく。

「……俺じゃ、ない？」

今夜はじめて、ぼくのほうから彼女を見つめた。  
そらされる、瞳。

「あの人に……田崎さんに、そう言って欲しかった。好きだ。愛してる。ほかの誰でもなく、あの人にそう言って欲しかった」

すこし震えている彼女の声。

「うまく、いかないね」

片端だけ持ちあがる、紅い唇。

「田崎さんもね、そう言ったの。うまくいかないって。お前を好きになればよかったって……そうすれば……」

とぎれる、言葉。

「……うそつき……」

この店の照明は、暗い。

並んで座るお互いの顔がようやく見分けられるぐらいに、暗い。

それは、こうして泣く女への配慮がひそんでいるのかも知れない。

けれどそんな大人の優しさをいまだ持てないぼくは、不器用にただ押し黙って彼女を見つめるしか出来なかった。

「わたしじゃないの……わたしじゃね」

静かに、あまりにも密やかに泣く、マリ。

彼女は、いつまであの男のためにこうやって泣くのだろうか。どうしたら、彼女を幸せにできるのだろうか。

「泣くなよ……」

ぼくには、無骨にハンカチを差し出すくらいしかできない。  
マリが顔をあげる。

涙であらい清められた、玻璃のような涼やかな瞳がぼくを惑わす。

「お前に泣かれると……どうしていいかわかんなくなるんだよ……  
泣くなよ……頼むから」

へドモド目を泳がせてそう言うぼくを見つめていた瞳が、つかの間おおきく見開かれた。

ついで、ひそやかな忍び笑い。

「……何だよ」

ぼくのハンカチで涙をぬぐう間も、彼女の口元は笑んでいる。

「何だよ？」

「男の人は……みんなそう言うのね。泣くな、どうしてよいか分からないから、泣くな……」

涙はもう、濁っていた。

彼女がハンカチを指先でもて遊んでいる。

「ねえナリくん」

問いかける、まなざし。

「……何だよ」

「わたしはじゃあ、どこで泣けばいいの？独りきり、誰にも気取ら

れないように、隠れて泣いてなきやいけないの？」

笑んでいた彼女の目や口元は、言葉をつぐほどに引き締まっ  
ていく。

「わたしはもう、気持ちを押し隠したりしない。『しちやいけない』  
『しなくちゃいけない』そんな言葉でごまかしたりしない。

わたしはわたしのやりたいように、やりたいことをやる。遠慮な  
んかしない。だって結局、わたしがしたことはすべて自分に反つて  
きて、わたしがそれを負って行くんだもの」

透明な瞳が強い光を発して、ぼくを射貫く。

「女が泣いていたら、抱き締めればいいでしょう？あなた達のその  
腕は、なんの為にあるの？ただの飾りなの？守るのは、外からだけ  
じゃないのよ。そんなのでわたしを好きって、なんで言えるのよ？  
どうして良いか分からない？あなたは、あなた達はそんな簡単なこ  
とも分かるうとしないの？」

ぼくをみすえる、その瞳。

胸倉をつかまれ、腹におもいきり拳をくらったような鈍い痛みを  
感じた。

以前、彼女は弱かった。ぼくが守ると、それが出来るのだとうぬ  
ぼれられるほど、弱かった。

いま、彼女は強い。血を流しても、その傷を冷静にみすえられる  
ほど、おずおずと伸ばしたぼくの手を振り払えるほど強くなった。

カタンと椅子が鳴る。

目をあげると、扉に向かって彼女が歩きだしていた。

「マリッ……」

呼ぶ声に、振り向く。

「さようなら、ナリくん」

嫣然と微笑んで、歩み去る彼女。その潔いまでにすっと伸びた背。ぼくを一顧だにせず、前へ前へと進んでゆく。

ギネスのずんぐりした小瓶の横に、華奢なグラス。

まだ半分くらい、赤い液体が残されていた。

それをしばらく見つめ、ひと息で飲み干す。

喉の奥、かすかに残った苦み。

こうして彼女は、行ってしまったのだ。

彼女（後書き）

これにて終了。

ご意見、ご感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6097s/>

---

彼女

2011年12月9日16時30分発行